

弘道

第923号

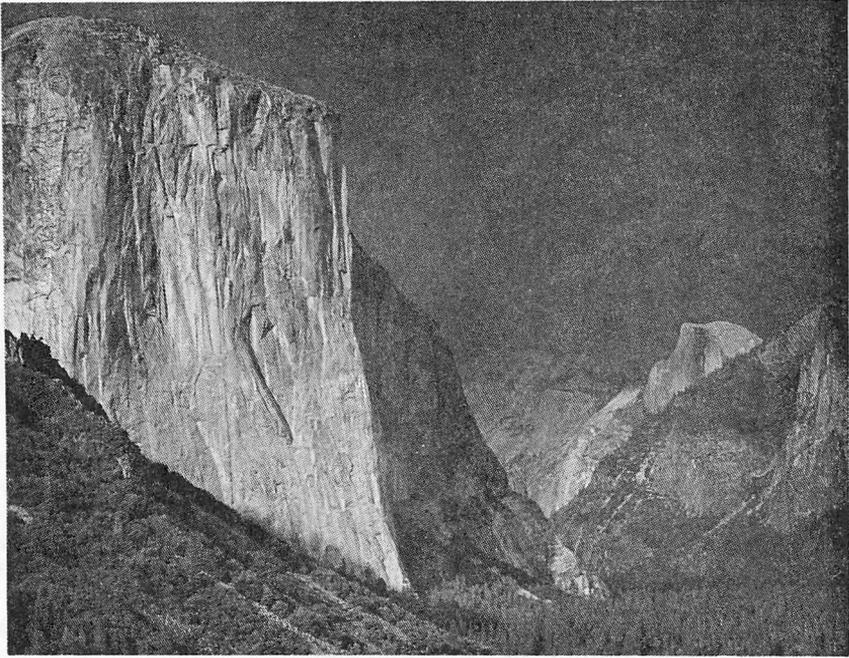
銷夏特集 旅(たび)さまざま

中国再訪の旅……………鈴木 勲	七神福詣での出会い……………加藤嘉三郎
中国の旅……………土田健次郎	南房総の旅……………小沢 秀吉
印度洋の船旅……………安彦孝次郎	学生時代の乞食旅行……………野口 元
印度に旅して……………西村 三郎	飛驒に信濃に……………木下 一雄
大自然のパノラマ……………石井 千明	海女の口笛……………山岡 俊明
一ヨセミテ溪谷—	「虚空遍歴」の文学碑を
あの頃ニューヨーク	尋ねて……………上山 定治
の片隅で……………伊藤 克己	秋の煙に似たり……………堀 賢次
留学娘エスコートの旅……………松本 孝二	心の旅路……………鈴木 寛一
修学旅行に思う……………箕 素彦	九州の旅……………岩崎 晶
旅の苦楽のこども……………古田 紹欽	—西郷南洲を偲びつゝ—
山の贅沢……………松平 直寿	
途中下車…安上りの	
小さな旅……………生山 智己	

〈北斗星〉間違った証言……………入江 徳郎
〈熟年からの健康〉リハビリテーション……………杉浦 昌也
ささやかな実践……………清塚十三郎
那須からの絵葉書……………上野 明義
【特別寄稿】わたしの徳育論……………牧 昌見
【泊翁百話】最後の長途旅行……………古川 哲史

昭和61.7~8月号

東京
日本弘道会



ヨセミテ渓谷の神秘的な景観

太古の氷河の侵食によって出来た広大な渓谷と奇峰の群。左手前に白くそそり立つ巨岩を『エル・キャピタン』といい、高さ実に910mという花崗岩の一枚岩だ。想像を絶する壮大な景観である。

雷鳴をともなった嵐が過ぎ去った直後、他の峰々を圧して大空に神秘的な光彩を放っている。(本誌17頁記事参照)

日本弘道会綱領 (昭五一・一〇・三〇)

甲号 (個人道徳)

皇室を敬愛すること、国法を守ること
 宗教は自由なること、迷信は排除すること
 思考を合理的にすること、情操を美しくすること
 学問を勉めること、職務を励むこと
 教養を豊かにすること、見識を養うこと
 財物を食らないこと、金銭に清廉なること
 家庭の訓育を重んずること、近親相親しむこと
 一善一徳を積むこと、非理非行に屈しないこと
 健康に留意すること、天寿を期すること
 信義を以て交わること、誠を以て身を貫くこと

乙号 (社会道徳)

世界の形勢を察すること
 国家人類の将来をおもんばかること
 政治の道義性を高揚すること
 経済の倫理性を強調すること
 自然の美と恩沢を尊重すること
 資源の保存と開発を図ること
 教育の適正を期すること
 道義の一般的関心を促すこと
 報道言論の公正を求めること
 社会悪に対し世論を高めること

目次 (昭和六十一年) 七・八月号

(泊翁先生訓) 善因善果……………(2)

銷夏特集旅(たび)さまざま

中国再訪の旅……………	鈴木健次郎	(7)
中国の旅……………	土田健次郎	(3)
印度洋の船旅……………	安彦孝次郎	(11)
印度に旅して……………	西村三郎	(7)
大自然のパノラマ……………	ヨシタテ	(14)
あの頃ニューヨークの片隅……………	石井千明	(16)
留学娘エスコートの旅……………	伊藤克己	(18)
修学旅行に思う……………	松本素彦	(20)
旅の苦業のことども……………	古平直紹	(23)
山の警沢……………	加藤智三	(29)
途中下車……………	生野秀吉	(30)
七福神詣での出会い……………	小沢嘉三郎	(33)
南房総の旅……………	野村元一	(36)
学生時代の乞食旅行……………	木下明雄	(39)
飛脚に信濃……………	山根一治	(41)
海女の口笛……………	堀山定治	(44)
「鹿若」遍歴の文学碑を尋ねて……………	鈴木寛賢	(50)
九州の旅……………	西郷南洲を偲びつゝ	(52)

北斗星…………… 入江 徳郎 (56)

間違つた証言…………… (56)

「熟年からの健康」…………… (56)

ハビビリテーション…………… (56)

ささやかな実践…………… (56)

那須からの絵葉書…………… (56)

特別寄稿…………… (56)

わたしの徳育論…………… (56)

最後の長途旅行…………… (56)

弘道研鑽…………… (56)

会告…………… (56)

支会だより…………… (56)

言葉のひろば…………… (56)

会員名簿…………… (56)

日本弘道会創立百拾周年記念式典案内…………… (56)

編集後記…………… (56)

訓 生 翁 泊

善 因 善 果

「善ヲ為セバ、之ニ百祥ヲ降シ、不善ヲ為セバ、之ニ百殃ヲ降ス」(善をなす者にはよい報いがあり、不善をなす者には悪い報いがある。善因善果、悪因悪果)と
いうことばがある。ところが、善いことをしても幸福にならず、悪いことをしても
禍害に逢わない者がある。それを理由に右のことばを疑う者が多い。しかし、善い
ことをするのは幸福を得る道であって、このほかに幸福になれる道はない。また
ま幸福にならない者があっても、それは百中の一、二に過ぎず、この百中の一、二
のために百中の九十七、八を棄てるのは、誤りである。もし善をなす以外に幸福を
得る道があるというなら、それを行なうのは勝手次第であるが、そういう道がある
理は断じてない。たとえば、五穀の成熟を願うならよく耕たがし、よく肥料を施すほかに
方法はない。よく耕しよく肥料を施しても時には善い収穫を得ないこともあるが、
それを理由に耕耘と肥料とを廃する理はないのである。

(泊翁居言第二冊(四十一)「為善降百祥」)

中国再訪の旅



鈴木 勤

中国の中央教育科学研究所は、わが国の国立教育研究所に相当する研究機関であるが、ここ一、二年の間に両国の研究所間の交流が急速に進展し、昨年十一月には、両研究所間において教育関係資料の継続的な交換をすることが公文で確認され、次いで、今年は、両研究所の代表団の交流をすることが合意された。

私は、この合意に基づき、小島科学教育研究センター長、大塚研究員とともに、六月十六日から約二週間、中国を訪問し、教育・研究・文化の実情を視察し、研究者等と意見交換を行った。

この秋には、中央教育科学研究所の呉畏所長以下の代表団が来日することになっている。

北京は、すでに雨期に入り、晴れると三十八度にまでなった。二年前の秋の訪中の時に較べて、女性の服装が一段とカラフルに自由になったことと、自動車の数がふえたこと、「鼓勵晚婚」のようなスローガンが目立たなくなったことなどが印象的であった。

北京では、北京大学、北京師範大学、人民大学付属中学

校などを視察した。また、北京科学会堂で、「日本の初等中等教育の現状と課題」と題して、学術講演を行った。この会堂は、各国の一流の学者が講演をするところときいているが、私もその栄を与えられたわけである。通訳は、国立教育研究所につき最近まで研究に來ていた周蘊石さんが担当された。

日本の近代教育は、制度的には、明治の学制が出発点であるが、その内容は、徳川時代の教育の遺産を質的にも量的にも多く引継いでいること、現在進行している教育改革の背景には、教育の普及が教育の大衆化をもたらしたところにあることなどに力点を置き、歴史的視点を重視して述べた。この概要は、六月二十七日の『光明日報』に「鈴木勲氏日本が現在実施中の第三次教育改革について語る」として、かなりのスペースを割いて報道された。

第二の訪問地は、安徽省の省都合肥である。古来江南への入口として兵家必争の地で特に三国志で有名である。曹操の將軍張遼が寡兵で孫権の大軍を破った逍遙津の古戦場には、張遼の馬が跳びこえたというクリークが残され彼の



北京科学会堂で講演中の筆者 右は呉畏所長

馬上姿の銅像が建っている。合肥には、曹姓の家が多く、中央教育科学研究所の秘書長の曹青陽氏も曹操の一門の後えいとか。三国志の世界が俄然身近になってくる。

合肥には中国科学院の直轄の科学技術大学があり、東京大学の工学部が学術援助を行っている。この少年班は、エリート教育として有名である。丁度授業が終った少年少女十数人と会談できた。理数系のエリート教育で五つのクラスがあり、十五歳で大学に入学させ、修業年限は五年で、ほとんどの者が十七、八歳で卒業し大学院に入る。一九八五年入学の最少年令は十二歳である。九割の学生は留学生試験を受けてアメリカにゆく。純理論的な研究によってノーベル賞クラスの学者になりたいというのが彼らの志望のようだ。その知識を中国の社会で生かすための応用的分野の学問に従事することや大学で後進に教えることなどはどうかと質問したが、誰もそういう志望をもっているとは答えなかった。少年班教育は、教科内容の面でも偏っており人間形成の上からも、またエリート意識をもつという点からも、問題がある、というのが、その後、各地の大学の教授たちにきいたところの反応であった。

第三の訪問地は、南京である。

合肥から夜行特急で五時間の鉄道の旅をした。むし暑い車内は扇風機が廻り、一時期の我が国の列車にも似ていた。座席にはうすべりのカバーがかかり、お茶を何杯も注いで

くれるのは、やはり中国風であった。

南京大学は、アメリカの金陵大学を接収したもので、往時の古い建物が残り、赤い星のマークがついた望楼風の建物などはツタで一面に覆われていた。外事公弁処は、曾つての何応欽將軍の住居という洋風の洒落た建物であった。

この建物に三日間通つて、南京大学、江蘇省の高等教育委員会、教育科学研究所のそれぞれの代表と会談した。日本の大学生の一番の関心は何かという質問があり、中国では趣味が中心で、これが問題だという発言が印象に残った。

中山陵と靈谷寺は大雨の中の観光であった。靈谷寺の境内の「三絶碑」を見ようとやっとなぞと探したが、紅衛兵に毀されて、拓本から復元したと書いてあった。無差別な文化の破壊をいろいろなところで見せられたが、これもその一つであった。

上海では、華東師範大学を訪ねた。名譽学長の劉佛年氏は、教育哲学の学者で、日本の學歷社会や共通一次試験の問題などに興味を示した。中国の教育学は、西洋の学理のうけうりで問題になっている。「認知」だけではだめだと思ふという意見であった。私は、どの民族も教育の思想はその伝統と文化の中にあり、その価値を見出し、それを評価することが必要であり、そのことなしには成功は得られないであろうと述べ、劉氏も同意された。

ここで少々腹工合がわるいといったところ、学内の医者

に診せましようと思われられて、医務室のようところで、鍼を打ってもらった。両脚のすねの部分に二本、へその下に一本深く打って十五分ほどじっとしていよという。暫くすると何となく気持がよくなった。中国の東洋医学の研究はさかんだが、その効果を学問的に検証して近代科学で裏づけるという点では未だしの感がある。南京大学では、医学では医学部をつくって、その中で隣接科学との連携協力によって、この点を究明していくことが必要だという意見であった。

上海で目についたのは、交通整理の老人たちの姿であった。二人で組んで、赤い小旗を持ち、交通整理をしているが、自転車の混雑と信号無視はここでも激しく、老人たちの小旗は殆んど役に立つようにはみえなかつた。警官が不足のため公務員定年後の老人の一定の期間義務として、奉仕しているが一日一元の補助が出るときいた。

蘇州を日帰りして汽車で最後の訪問地杭州に向つた。

西湖のほとりに岳廟があり、南宋の忠臣岳飛を祀っている。大殿中央の岳飛像は真新しくみえる。文化大革命で破壊されたものを復元したのだという。靈隱寺は、観光客で溢れていたが、珍らしく宗教的雰囲気は漂う寺域で、摩崖の石刻像なども人気があり、特に笑を湛えた布袋像のそばでスナックをとる人が多かつた。布袋は中国では弥勒と呼ばれている。

西湖は青い山に囲まれ、さざ波の立つ湖面に船が浮んで、日本の風景に似て美しい。蘇東坡がこの風光を愛し蘇堤を築いたのもむべなるかなと思われる。

杭州大学では、比較教育の王昌緒教授が日本通で、文部省顧問の天城勲氏や文化庁の渡辺通弘君などをよく知っており話が弾んだ。

中国再訪で気づいたことの一つに、一人っ子問題がある。街では親子連れが目立ったが、多くの場合、きれいな服を着せてかわいい子供の手を引いたり抱いたりして歩いているのは若い父親である。英文のチャイナ・デイリーに面白い漫画がのっていた。「昔の家族と今の家族」という題で、祖父母が真中の椅子に座って孫がその脇に立ち後に両親が立っているのが昔の家族、孫が直中の椅子に一人デンと座り両親に両親が立ち、祖父母は後に立っているのが今の家族というわけである。

家庭の中心、小さな天使という、中国社会における一人っ子の位置をよく象徴している。

農村では人手が欲しいので罰金をとられることを承知で男の子を生む。女の子だと嫁がいじめられたり自殺にまで追いやられるケースもあるという。人口問題の深刻さは理解できるが人倫の問題はもう少し自然に委せる部分があったてよいと思う。

『北京周报』に「一人っ子の教育問題」を同誌記者が書いています。専門家は、一人っ子の弱点として、(1)物事を自分で処理できない、(2)友愛性に欠ける、(3)わがままで物を大切にしない、とみている。恰も、わが国最近の過保護・過干渉の子育てをみるようである。

四十歳以下の父母は、成人になったばかりの時に文化大革命にあい、理想も抱負も水泡に帰したので希望を子供に託している、というのが一般的な心情である。然し、子供を甘やかしたりあるいはむやみに叱るだけで、子供の教育がよく分っていない。学校が家庭教育講座を開いたりして親の参加を求め、父母に熱心に支持されている。親自身の教育を必要とするという点で最近のわが国の教育問題の实情と酷似しており興味深い。

もう一つは、道德教育の問題である。

呉畏所長の中国の教育改革についての説明で、第一に挙げられたのは道德教育である。然し、その内容は、マルキシズムの正しい理解ということのようだ。

社会主義国家における道德教育の問題は、共産主義道德の低下という問題以前に、日常の市民としての生活の規範の弛緩というところにあるのではないか。北京や上海の都市でみられる交通規則の甚だしい無視、バスに乗っても老人や先生に席を譲らない生徒の存在など、共産主義道德と

は直接関係のない現象であろう。

『北京周報』に「伝統的な道徳の役割」という記事がのっている。伝統的道徳は共産主義道徳と比べると比較的低い次元のものであるがその基礎となるものである。パスの中で老人に席を譲ることさえしたくもない人が、「いささかも自分の利益を考えず、もっぱら他人の利益をはかる」という共産主義道徳をもつことは想像できないのである。「旧い時代に形成され、発展してきたすべての伝統的道徳がいずれもやぶられるべきだという認識は、理論的な誤りのみならず、実践において非常に有害なものである」というのが論旨である。

中国の旅

一
学生時代はほとんど旅をしたことがなかった。大学に職を得てから、地方の学会に行くとか、あるいは長期休みに調査をかねて遠出をするとかいうこともあったが、いずれもあらかじめ切符や旅館の予約をしておくというまことに平穩で無難な旅であった。

一時批孔批林と激しかった孔子批判も今は影をひそめているようにみえる。孔子の生地曲阜の孔廟や孔府は、国内の観光客で溢れているという報道もある。

野口先生は、「中共の批孔批林の問題」という論文『弘道』昭和五〇・一〇〇)の中で、批孔論を検討してみると徒らに政治的色彩が強い印象をうけるとし、政権が安定すればこの問題も緩和する時が来るべく、今は一時的の波の如き感もする、と述べておられる。

その見とおしの如くなってきたのではないかというのが、私の中国再訪で得た印象の一つである。

(本会々長)



土田健次郎

昔の旅は日暮まで歩き、たどりついた宿場で分相応な旅籠を見つけて投宿するといった風であったはずだ。おそらくこれが旅の元来の姿であろう。ところで私は昨年、初めてこのような旅らしい旅をあげわうことになった。場所は中国である。

去年一年間、北京大学で交換研究員として研究の機会を得たが、そのおり知人につれだされ四十日間にわたる長旅

をした。まわった地方は、北京をふりだしに、浙江、安徽、江西、福建、広東、湖南、湖北、河南、そしてまた北京。その時こそまさに、切符も旅館もその場その場でさがしまわるといふ旅であった。

中国にも旅行社はある。しかしこの旅行社ほどあてにならないものもめずらしい。予約の遵行はいいかげんだし、そのわりに値は張るし、悪評噴噴である。そこでいきおい予約にたよらぬ飛びこみ型の旅をすることになる。

「中国の旅」といった題の雑誌は、日本の書店にも何種類か置いてある。土地土地の名所旧跡、色とりどりの名産、中国の人たちの明るい笑顔。まことに楽しい一方の旅の風情である。テレビでよく放映される中国物もまたしかり。中国の景勝と人情が思いいれたつぶりに語られる。

私は六年前にも二週間ばかり中国旅行をしたことがあった。いちおう調査団と称してはいたが要するに例の団体旅行で、とにかく毎日いわれた時刻にいわれた乗物に乗りこみ、定められた場所で食事をして定められたホテルに泊る、という乗っかってしまえば安楽至極な旅であった。バスの窓の外に展開する中国人民のわさわさした姿は、映画館のシートで見るスクリーンのようにしかなかった。

二

ところが今度の旅は、この中国の人たちと押しあいへし

あいの連続であった。列車や長距離バスの切符を買う時は長蛇の列、わりこみは年中、それを注意するとひともしゃく。やっと切符を買っても、今度は乗物が来る前にまたならぶ。乗物が来てからがすごい。せつかく作った（という作られた）列などおかまいなし、みないっせいに先を争って乗口へささとうする。竹のさおの両端に大きな荷物をぶら下げたり、ふとんを肩にかかえあげたりしている男たちが突進する。子供たちが泣きだそうだが、老人が転倒しうが関係ない。

乗物に乗ってからがまたすごい。とにかくみな実によく痰を吐くし手鼻をとばす。床はそれで気持ち悪くねとついている。こんな床に誰しも自分の荷物を置きたくなからう。それで少しでもきれいな場所を争うことになる。席のとりあいのすごさは、容易に想像がところ。

それでも落ち着くと、見知らぬ同志でも世間話も出るようになる。そこでずさんでいた心持ちも少しはなごむ。

町の食堂に入れば、けっこう乞食がいる。新中国に乞食がいなくなつたなどは誰が言いだしたことか。湖北省の襄陽でこの乞食たちに食卓を囲まれて往生したこともある。

宿は適当に飛びこみでさがるのだが、一番ひどかったのは福建省邵武の駅の近くにあって旅館。全く掃除した気配なし。欠けた茶碗には茶の葉が腐ってこびりついているし、床はちらかり放題。ふとんは上にかけるだけ体が汚れそう。

半びらきになっている破れガラスの窓などさわる気もしない。一番安かったのは湖北省武当山の民宿。一晚なんと二元五角（日本円で一五〇円ほど）。もちろん便所も水道もない。便所はと聞いたら、外で適当にやれと答えられた。床も張ってなくて下は土。電気は自家発電でほんの一時間ちょっとで消された。あとは真暗闇。それでも宿の主人の感じはよかった。

別に中国に悪意があつてこのような事を書きつらねているのではない。一般に報道されている中国と現実との落差を書いておきたかったからである。

このような情況は今の中国ではやむをえないのである。新中国成立後、文化大革命をはじめ大規模な内紛がいくつもあった。中国ではこの文化大革命を「十年の動乱」と呼ぶ。そのため中国の現代化は著しく遅れ、今はそれを取りもどすのに必死なのである。中国は現在一つの「戦後」なのであり、その中で十億をこえる人々が肩をぶつけあひながら生きていかなければならないのである。

三

中国で道を聞くのはお年寄りに限る。

北京に着いてから市内を見物しはじめたが、ある時、やたらに大きな明代の鐘があるその名も大鐘寺を見物に行つた。とにかく場所がわからない。二、三の若者に聞いたが例

によつてろくな返事をしないか、いいかげんな答えをする。そこで道わきで日なたぼっこをしている老人たちになぞねたところ、すぐに親切に教えてくれた。寺はすぐにあった。また、元の土壘を見物したあと、人民大学を經由して北京大学の宿舍へもどる時、バスを待っていた。すると通りすがりの初老の人が私に話しかけてきた。「どこに行くのだ。」「人民大学へ行くんです。」「このバスは日曜日はないよ。人民大学へ行くのならこの先のバス停で乗りなさい。」「外文局に住む中国人夫婦をたずねて行つた折のこと、やはりその場所がわからなかった。孫らしい男の子を連れてくる老人に会つたので聞いてみたところ、その老人はしゃがみこんで土の上に地図を描きながら懇切に教えてくれた。私は思わず手をさしのべて握手してしまった。

なぜ老人の方が親切なのか。この疑問は何人かの日本人も持っていた。正直なところ今の中国はとても礼儀の国とはいえない。高い旅行費をはらつたり鳴り物入りでくりこめば、むこうは密着サービスをしてくれる。しかし通りすがりの旅行者には、ふつうはぞんざい至極である。団体の大名旅行で中国に行き慣れた人々には、なかなかわかつてもらえない実情である。

中国で何人かの日本人とこの件を話した際、誰もが首をかしげたのは、これが果して昔からの中国人の姿なのか、それとも共産中国になってからこうなつてしまったのか、

ということである。このことはもちろん速断は禁物である。しかし戦前この地に遊んだ人たちの話を聞く限り、おそらく新中国になって礼儀を忘れること著しくなったように感じる。

この頃中国では、『礼貌和礼貌語言』、つまり『礼儀と丁寧な言葉使い』といった種類のパンフレットまで出ている。平等を鼓吹するあまり、人はみな無礼になってしまったという反省からであろう。平等、平等とばかり叫ぶと、どうも結果的に低い方にならされてしまうようだ。無礼と平等とは違うのである。

四

さて、中国国内を旅した際、特に記憶に残ったお年寄りのことを最後に書いておく。

福建省の建陽をたずねたことがある。建陽は朱子終焉の地。朱子は中国近世最大の思想家。彼の影響は日本、朝鮮、ベトナムにも及んだ。その彼はこの地を本拠地の一つにし、晩年は考亭書院を営んで最期まで学問と教育に情熱を燃やし続けた。亡くなる三日間に命の残り火をかきたてて己れの著作に手をいれたという有名な話を弟子が記録している。その考亭書院の跡をたずねたのである。宿泊していた崇安からバスで建陽まで行き、そこから発動機つき自転車の引く幌つき荷車（いわゆる三輪車）で何とかその地にたどりつ

けた。今は明代の門だけがぼつんと立っている。建物は文化大革命の時に破壊され、更にダムのため地形が変ってしまっていて、この門も本来の場所から移されている。門のあたりの地形を観察していると通すがりの土地の人から朱子の子孫がまだこの地に住んでいることを聞いた。できれば会いたいものだと思ったら、何と会えたのである。人家のある方に歩いてみると何やら曰くありげな温厚で気品のある老人が来る。もしやと思つてたずねてみると果して朱子二十四代の子孫の朱蘭溪老人だった。私が朱子学の研究をしている旨を述べると、老人は我々を家に迎え入れてくれた。小さい孫娘があめを皿にのせて運んできて、「食べたら、食べたら」とすすめてくれる。老人から黄坑にある朱子の墓の修理報告と写真や、朱子の生地尤溪にあった書院の再建通知を見せてもらい、結局心づくしの昼食までごちそうになった。老人と娘さん御夫婦、お孫さんたちと食卓を囲みながら、文化大革命の時に受けた迫害の話などをうかがった。老人は現在八十一歳。家が貧しく学校もろくに出していないが、独学し詩までも作られる。私のためにメモ帳に書いてくれた朱家に伝わる教訓詩や在りし日の考亭書院の見取図の文字は、品格ある立派なものであった。

朱老人の親しみやすいくかにも中国の古老といった風姿に接し、本当に中国に来てよかったと思った。

一つの忘れ難い心躍る思い出が、多くの不快な記憶を消

してくれる。中国の旅はと聞かれて、いつの間にか楽しかったと答えるようになった。

(本会評議員 早稲田大学助教)

印度洋の船旅



安彦孝次郎

一

海外旅行の場合、飛行機を利用するのが今日一般的であるが、私が曾て文部省の在外研究員としてドイツに行った時は、我国には旅客機はなく船だけであった。

当時ヨーロッパに行くには三つの行程があった。太平洋からアメリカ経由、シベリア鉄道、そうして印度洋航路である。私は印度洋を選んだ。

昭和四年の春だったが、横浜から出帆してマルセーユに着くまで四十日かかった。今から考えれば嘘のような話だが、時速十三ノットで港々に泊って行くのだからこれが当り前であった。

上海と香港にそれ／＼一泊して南方に向ったのであるが、最初に私の眼に映ったのは、海上に揺れているジャンクの群であった。中国の漁舟である。横に節目のある暗褐色の

帆を張っている。帆と言えば白とばかり思い込んでいた私にとつて、それは異様な風景であった。愈々他国に来たのだとゆう実感が湧いたのはこの時である。

この辺から海の色がだん／＼変り、赤道附近まで来ると明るいコバルト色となった。

シンガポールに着いた時だったが、マレー人の若いのが、乗客の投げるコインを取ろうとして我先にと海中に飛び込むのには驚いた。透明な海水の中を屈折しながらもぐってゆく肢体がハッキリ見えた。貧しい彼等にとっては、これでも一応の稼ぎになったのであろう。

二

赤道の暑さはたまらない。シンガポールから乗ったデッキパッセンジャーが羨しかった。彼等の多くは労務者であつて、安い船賃で涼しい甲板にテントを張ってコロソボまで稼ぎに行くのだ。

彼等としては、高い船賃を払って窮屈な服装をしている
一等食堂の紳士達が哀れに見えたことであろう。

この食堂には沢山の円いテーブルがあり、そこには予め
決められた席次のしるしがあった。船長を中心とするメー
ンテーブルには、船内で最高とみられる格式の人が着席す
る事になっている。

想い出せば、そのテーブルに着いた一人は、「虎の殿様」
〔新聞命名〕であり、その隣には、後年内大臣になった明
治元勲の二代目がいた。何れも侯爵であり、また貴族院議
員でもあった。

ところでこれらの肩書がそれから二十年足らずの間に、
社会から全く影を没するとは、当時、船内の何人が予想し
得たことであろう。

考えると、近代の船は移動するホテルであつて、日本船
でも西洋の様式その儘であるから、彼等が快適に振舞うの
は当然だが、これと比べわが同胞はどんな風であつたか。

一例を言えば、彼等がワイシャツ一つの軽装で食事をし
ている時でも、我々には浴衣がけは許されなかつたのであ
る（但し二等食堂は自由だつた）。

だから、甲板にゴザを敷いて浴衣ご免のスキヤキの宴が
張られた時は嬉しかったが、浴衣一枚で天下を取つたよう
にほしや燥ぎまわる姿は、後で思い出して哀れに見えてならな
かつた。

さて、コロンボに上陸して先づ私の眼に映つたのは、印度
の顔であつた。路傍にあぐらをかいてコブラを踊らせてい
る大道芸人や、銭をせがみながら我々にまつわりついて来
る子供達の顔である。見ると色は黒いが彫りが深く眼が澄
んでいる。今まで見て来たマレー人とはまるで違う。

今でこそ我々は多くの印度人を見馴れているが、当時の
私には珍らしかつた。おかしな話だが、いつの間にか私は
鎌倉の大仏の面を思い浮べていたのである。やはり釈迦の
国だと思つた。と言つても彼等がその外面にふさわしく釈
迦の教を信じているかどうか、甚だ怪しいものであつた
が、只私は彼等が現に住んでいるこのセイロン島こそが、
印度の中で仏教が残っている唯一の地域である事だけは知
らせてやりたいと思つた。但し思つただけで其の儘船に戻
つて来た。

三

この航海の中で最も無聊に苦しむのは、コロンボからア
デンに着くまでの十日間である。

船客仲間の戸籍調べの会話は已に尽きている。眼に映
るものは茫々たる青海原のみである。こうした時私の頭に
浮んで来たのはいつも東洋と西洋との比較の問題であつた。
考えると、西洋と言へばヨーロッパとアメリカとを指す

のが我々の常識だが、東洋とは一体どこからどこまでを言うのであろうか。

若し東洋とは、日本を含めてスエズ以東の国々を指すすれば、西洋の同一性と比べて何と多種多様であることか。船がアデンに着いた時、私はこの想いを新にしたのである。

アデンは赤黒い岩壁を背にした乾燥した港であった。あたりには緑は一色もない。タクシーが、最近出来た公園を案内するとゆうので期待して行ったら、成程樹木だけは植えられていたが、何れも葉が萎れており、霜焼けした桑畑のようであった。

少しでも緑が欲しいとゆう念願から造られたのであろうが、やはり風土の個性を変える事は出来なかつたのである。市外に出たら一望果しのない砂漠であった。私は、はじめて見るこの不毛の大地を前にして、これが和辻哲郎の「風土」に出て来る「乾燥」とゆう概念の生れた基盤かと、暫く思案に耽った。そうして私は、数日前に肌感じた程度の「湿潤」を思い返し乍ら、改めて東洋の多様性を実感すると共に、これらの現象につながる民族性の特質を比較してみたいと思つた。

四

船が紅海を渡ってスエズに着いたのは真夜中であつた。

月が照っている中で、カイロ行の自動車がずらり並んで我々を待っていた。

想出になるが、この時の砂漠における数刻ほど速度の凄さとゆうものを感じた事はなかつた。座席に腰をおろす事の出来ない程の疾走である。歌で想像していた「月の砂漠」を眺める余裕などは全くなかつた。

やがて我々はカイロに着き翌朝ピラミットに向つた。

考えれば、ピラミットは古代エジプトの象徴と言つてよい。数万個にのぼる巨大な切り石を積み重ねて造つたこの構築こそは、エジプトの過去における栄光を偲ばせるに充分であるが、現場に行つてみると、大自然にみるような変化もなく、さては人工の精緻も見当らず、むしろ途中の橋上で朝霧を通して見た遠望の方が魅力的であつた。

さて我々が、地中海に面するアレキサンドリア港で待つていてくれた船に戻つたのは、それから間もなくであつた。そうして私は、数日後にマルセーユに上陸し、パリイを経由してベルリンに向つた。

(横浜市立大学名誉教授)

印度に旅して



西村三郎

今日、印度というと、わが国では、比較的縁の薄い国のように思われるけれども、国土の広さも、人口の多いのも、中国に次ぐアジアの大国で、古くから関係の深い国である。わが国では、唐、天竺といえば、古来の全世界を現わしていたし、仏教伝来以降は、仏教の創始者、釈迦牟尼の出生の地として、深い尊敬の念をもって、一種の西方浄土の地として崇められていた。

一度訪れてみたいものと考えていたところ、偶然の機会に恵まれて、全土隈なくという訳にはいかなかったが、若干の地域を訪れることができたので、その中、特に印象深く記憶に残っている。三ヶ所だけについて記してみたいと思う。

現在の印度の仏教は、殆んどが、遺跡として残っている程度の力弱いものだが、在来からのヒンズー教が強い信仰に支えられ、歴史の流れの中に、回教もかなりの地位を占めているというように、宗教も多様であり、宗派もさまざまあるようである。

長く英国の支配下に植民地としてあって、近代化が遅れ

たり、その後独立はしたものの回教圏の分離独立など重なる最下層の貧困な人びとが充満している、古いデリーを見ると、それが一目瞭然としていることを知るのである。

概況はさておき、先ず、私が驚き感嘆したのは、アーグラにあるタージ・マハールである。白亜の総大理石をもって建てられた、左右対称の高さ六五米のドームを真中にもつ四角な建物と、境界の四隅に高さ約四〇米の塔をもつた五七米四方の誠に美しい建物である。敷地は幅三〇〇米、奥行五八〇米の広さがあり、ジャムナー河を背に、表の大門から建物の間には、通路の真中に、細長い池があつて、美しい建物の姿を映し出し、まことに見事な景観である。

もともと、この建物は、ムガル朝第五代の皇帝、シャール・ジャリーンが、遠征中に、妃のムムタージが、産褥

熱のため亡くなったのを深く哀しみ、自分のアーグラの城から、四六時中眺められるところとして、ここに廟所として建てたものであり、内部には、帝から妃に生前贈られたという碧玉、瑪瑙、瑠璃などの寶石を嵌めこんだ花環と花束を形どった中にかこまれて妃の柩が安置されており、その北側には、帝のやや大きい柩も安置されている。

一六三〇年から二二年間かけて、印度産の大理石だけでなく、中央アジア、ウズベックや世界各地から集めた大理石でつくられ、イタリヤやフランスの技術者も加わって、造りあげられたイスラム建築の白眉であり、世界の名建築の最高傑作の一つとして高く評価されている。ただ、昼間見ただけでも、その美しさ、見事さに見惚れるのであるが、満月の夜に見るのが、最高に美しいといわれている。

次は、ガンダーラの石窟の中の仏像である。ガンダーラは、デカン高原の北部の不便なところであり、ボンベイから航空機でオーランガバードに行き、そこから自動車で二時間ぐらいかかる距離にあり、断崖に数多くの横穴を掘り、その中に仏像を安置しているのであるが、問題にされるのは、一世紀から六世紀にかけて、仏教とヘレニズム文化が融合して形成されたものであり、その最盛期は、クシヤナ王朝のカニシカ王（一四四年—一七三年）以後の一世紀である。仏教徒は、はじめ仏像を人の形で表現するのを知らなかったが、ギリシア人の神像が、人の理想像で表現される

のを見て、ギリシア的手法で作りはじめたので、仏像もギリシアの神像に似ている。その芸術が中国の雲南を経て、わが国にも影響を及ぼしたのだという。日本仏教との縁がこんなに古くからあったことを知る機会に恵まれた。それだけに、大変感動を禁じえなかったのである。近くには、アジャンターやエローラの遺跡もある。

私はそこに赴く前に、足を捻挫していたので、松葉杖をつきながら見てまわっただけに、全部を見ることはできなかった。見た幾つかは、ひとしお印象が深いものがあった。写真機は持参したものの、ストロボの用意をしなかったので、窟の内部を写しとることができなかったのは、かえすがえす、残念なことをしたと思っている。

その三は、釈迦が最初の説法をしたという鹿野苑（現在サルナート）に詣でたあと、ペナレスを訪れたときの感動である。

ペナレスは、ガンジス川中流左岸にあり、ヒンズー教の王国の中心地で寺院も密集し、ヒンズー教最高の聖地で、印度各地のヒンズー教徒の巡礼者が集まり（一生に一度はペナレスへという気持を信者のすべてが持っているという）ガンジス川で沐浴する。一一世紀以後、イスラム教徒の侵入により荒されたが、今はすっかり元通りになり、巡礼姿の人たちで満ち溢れている。

沐浴する川岸のすぐそばに、露天の火葬場がある。ヒン

ズー教の信者たちは、^{カイト}靈魂の不滅を信じているので、死んだら、遺体をこの火葬場で処理されることを、最高の幸福であると誰もか信じ、強くそれを望んでいる。木材を積み重ねて火葬にするという原始的なやり方であるが、煙とともに魂は天に昇り、焼いたあとと骨と灰は、そのまま、ガンジス川に流されるのであるが、それは、肉体が大地に帰るのだ、と信じられている。

この所のガンジス川岸の近くは、それほど深くはないので、岸辺の近くで、老若男女の信者が大勢で沐浴しているし、ある者は聖なる川の水を持ち帰るため、容器に詰めて

大自然のパノラマ

—ヨセミテ溪谷—

六月十七日(日)

パサディナの早朝は曇っているが、太陽が昇るとすっかり空が晴れる。今朝は五時半頃に目が覚め、読書のあとテレビの二十八チャンネルを暫く見る。朝食には木村、久保両君の他福田、久米井君も加わる。

マクドウェル総支配人の見送りをうけて、午後一時ロス空港を発つ。午後二時サンフランシスコの空港に着き、大量の荷物と共に大型の車で市内ノブヒルのマークホプキン

いる。沐浴しているときは、信者の最高の幸福にひたっている時であると考えている。川岸では洗濯している者もいるし、まさに、ごった返しの盛況で、これが毎日の姿だと聞いて、その信仰心の深いのに驚嘆した次第である。

仏教は、印度におこり、中国、朝鮮半島等を經由して、わが国に伝わり、今やわが国が最高の仏教国となり、印度や中国では、殆んど衰退してしまつたのであるが、わが国の仏教も形式的な仏教王国ではなく、真の信仰宗教としての本質が、生きることをひたすら願ってやまない。

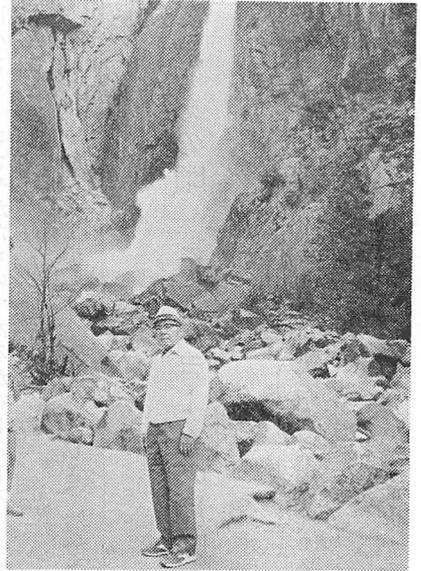
(特別会員 元・大妻女子大学教授)



石井千明

ホテルに運ばれる。数年前に一度泊つたことがある高級なホテルであるが、ハンティントンホテルとは環境がまるで違い、環境による安らぎがない。古典的な豪華なホテルではあるが、心の安らぎを求めることは出来ない。

夕食を支那人街の皇后ですることにし、市内電車に乗ってみる。サンフランシスコの六月は寒い。殊に今日は風が強く、くしゃみがしきりに出る。明日はヨセミテ観光を予定しているので早く帰ってやすむ。



ヨセミテ滝を背にした筆者

六月十八日(月)晴

朝五時起床、朝食後午前九時迎えの大型自動車に着く。運転手の他に田中という同志社大学出身の案内人が同乗していて、私共夫婦と木村君夫妻、久保俊夫君にヨセミテ観光の予備知識を色々説明してくれる。同志社大出身なので、創立者新島襄先生の話がしきりに出る。沿道の見渡す限り曠野のいたる所に、金属性の大きな風車の形をしたプロペラが沢山並んで立っているのを見つけ、聞けば、風を受けて発する電気を、電力会社に売っている個人所有の風力発電所の由。荒地利用の一面をみる。途中のドライブインで昼食をすませ、ヨセミテへ向って一路直進する。自動車が大いなのであまり疲れない。約五時間かかって現地に

到着し、マクドウェル氏の紹介によるアワニーホテル(Ahwanee Hotel)に入る。それぞれ定められた部屋で小憩後、カメラをさげて戸外に出てみて、先ず驚かされたのは、エル・キャピタン(El Capitan)という花崗岩の一枚岩が眼前に聳え立っていることである。高さ三〇〇〇フィートという。私はその巨岩の前に圧倒されて、ただ呆然と眺めていた。

私は同行の一同と共に、この歴史が録されている記念館に入り、この土地の創成について知らされた。又、ハーフドームという有名な巨岩があり、これらは五億年前に海底の地殻変動により、海底から隆起して出来、三億年前の水河期に削りとられ、ハーフドームという高さ五〇〇〇フィートの奇岩が生じたと録されている。かくて世界で最も珍らしい形の奇岩が出来たという。冬季、雪化粧をした姿は俗人をよせつけぬ峻厳な楼閣となるというが、今、六月は青空をバックに荘厳な、しかもゆつたりしたシルエットを見せて横たわっている。麓を流れる清流マーセド川は、冬積った深い雪を源とする雪解け水と、長年に亘って堆積した氷河が僅かづつ解けて水量を増しつつ流れている。余りにも我々の現実社会とかけ離れていて、私の思いは次第に現覚を失い、人類未生前の世界、神の造り給える原始の中を彷徨しはじめ、人間の現実生活の虚しさを覚える。

やがて、私達はここを象徴するヨセミテの滝に至る。三

段階になって落ちてくる滝は、落差七三九米あり、世界第三位の滝であるという。巨大な岩壁や、現世にあるを忘れさせる長大な滝を一望に収める、インスピレーションポイント(二〇〇〇米の展望台)やグレーションポイント(二一九九米)に立って、遙か遠くに麓を霧状に拡がって落ちるブライダルベールフォール(花嫁のベールの滝)を眺めると、いかにも人間の微小さ、儂さを感じる。平生私共の考えている、哲学的意味の永遠とか時間の観念など、吹き飛んでしまうようであった。大部分観念の世界でのみ生活している、峻厳な現象に出会っていない我々は、人間の世界の到達できない、神のみの為し給えるみ業の前に頭を垂れて懼れ戦き、只々謙虚にならざるを得ない実感と、人間がいかに小さく、ささやかなものであるかをしみじみ感ぜしめられたことであった。

夜はホテルのロビーから仰ぐ夜空の美しさ、清浄な大気

あの頃 ニューヨークの片隅で

もう二十年以上も前のことです。昭和三十年代の後半、あこがれのニューヨークに赴任して、一年たつて、やっと家族を呼び寄せることとなり、クイーンズ地区に居を構え

を透して仰ぐ星空は、汚濁の人間の世界を離れ、清い夢の中に遊ぶ思いがした。東京では見られない空であった。

三千フィートの高さより落つるヨセミテ滝霧飛沫となりあたりを包む

厳肅なる神のみ旨のしのぼるる大自然の夜半のしずけさに祈る

朝まだきマーセド川のほとりゆき人類未生前の岩壁を仰ぐ

悠久に流るる水を見てあれば濁世のことも忘れゆくと

(本会理事 フェリス女学院理事長)



伊 藤 克 巳

ました。あこがれのニューヨークと言っても、まだ日本が高成長国と言われる前、先進工業国にまさに変ぼうを遂げつつある、国民の一人一人がまだ戦後を背負っていた時期

でもあり、ニューヨークでも、決して良い生活をさせて頂いた訳ではありません。アメリカは車無しでは生活できないとて、最も安物の車を、それも中古車を買って乗っていた頃です。

ニューヨークのアパートと言えば、高層レンガ造りという代名詞になっていますが、運よく、レンガ造りのムードながら、リビングルームが芝生の裏庭に通じている、ガーデンアパートを見つけることが出来ました。今の言葉でタウンハウスです。

アパートの向う三軒両隣り、上の一軒はイタリア系の夫婦で、旦那は失業中、デブの奥さんはエーボン化粧品セールスで家族を養い、私の妻もつきあい買いをしていたようです。この奥さんは何とも親切な方で、初めて外国に住み勝手の知らない妻に、何かと声をかけてくれ、英語がわからないとみると、何度も同じことを繰り返し説明し、アパートのコインランドリーの場所にも早速連れてゆき、使い方の説明までしてくれました。午後三時のお茶の時間になると、ケーキを焼き、コーヒーをいれて、妻、子供をよんでくれたものです。

上のもう一軒は、亭主がカナダから移り住んで来た、学校の音楽の先生で、子供が我が家と同じ三歳だったこともあり、私の長男を呼んでは、一緒に、ご自慢のクラリネットを聞かせてくれました。この奥様はと言えば、その頃私

共にはまだ見たことのないような、背丈一ばいのミンクのコートで年中着込み、古びたシボレーに乗って、スーパーに買い物に行くのでした。恐らく、嫁入り時に持参し、虫干しの為年中着ていたのでしょう。

別のお隣りは、一風変わった中年の夫婦でした。奥様は元女優だとか、髪はぐるぐる巻いて上につきあげ、真黒のブラウスに大きな胸をつき出し、金モールのついたドレッシーなずぼんをはき、いつもピンクのブードル犬を連れて、威厳ありげに散歩していました。リビングルームのインテリアが又変って、見事です。壁には、昔の中国の、極楽浄土にまします仙人の絵を垂れ掛け、金ピカピカのグラランドピアノ、金ピカテーブル、ルイ王朝風のソファといったたずまいです。

このお宅の大晦日の年越しパーティーに、近所の方々共々お招きをうけました。赤、青、黄と、色とりどりのトンガリ帽子をかぶり、シャンペンの栓をポンポンと勢よく抜いて、今や遅しと待ち構え、一月一日零時のこの瞬間を、一斉に紙笛を吹きならし、夫婦はチュウを交わし、歓声をあげて祝ったのでした。

こうして私達の初めての外国生活は、親切、寛大で、陽気、くつたくなかないアメリカ人御家庭に、仲間として暖かく迎え入れて頂くところから始まったのでした。ニューヨークと言えば、摩天楼のそびえ立つ冷たいビル街とつい

思いがちですが、日本の下町風とも言える暖かい人情、そして人々の心のゆとりがあったように思います。衣食足って礼節を知ると申しますが、当時のアメリカには、衣食足り尚かつ、陽気であつたのではないヤンキー氣質があふれて、外国人にも住み良い街となつていたのでしょう。

最近、私は日本人の顔が二十年位前とかなり異つてきたように思います。くつたくなかない、円満な顔つきになつてきたようです。新人類が若い街をかつ歩すれば、旧人類たる中高年層も、負けじと、格子縞のジャケットの着ながし

留学娘エスコートの旅



松 本 孝 二

(住友商事・東京ビル事業部長)

朝六時、前の晩にチエックアウトをすませたホテルのロビーは、未だ深夜の様に静まり返つて居る。

夏時間の九月末、シカゴの午前六時は未だ夜である。ホテル前のリムジンバスの停留所でオヘア空港行のバスを待つ。同じバスを待つ六、七人の米人客が集つた頃、モンロー通りの反対側に大型の余り綺麗でない車を停めた一人の若い黒人が、通りを横切つてやつて来た。彼は米人達の方は見むきもしないで、私にオヘア空港迄リムジンバスと同じ料金で行くから乗れと云う。金儲けの為ではなく外国の

といった具合に、おしゃれに気遣いを見せ始めました。もがき、背のびをしてきた高度成長経済の尖兵達の任務は果たされ、これ以上突出すれば諸外国から孤立しかねない有様ですから、旧人類もおおらかになつて、新人類に同調してゆくことも、時代の要請でしょう。円高だ、企業存亡の危機だと叫ぶかわりに、静かに語らいかけ、新人類達が、今日も人生の旅にくつたくななく飛び立つのを、おおらかに見守つてゆきたいものです。

人に親切にするのが私の目的だ、などとしつこく食ひさがる。私の同伴の姪親娘は、少し離れた所で心配そうに眺めて居る。この様な手合いの鴨になる日本人客が時々あるとゆうことであらう。

オヘア空港からシンシナティー空港への国内線の自由席は満席で、隣席は商用でシンシナティーに行くという中年の会社員風の米人である。話好きな人で、私が東京で予約しておいたシンシナティーのヒルトンインが市内からかなり離れて居る様で困つて居ると話すと、すぐに彼は地図で

調べるからと云ってくれた。鞆を開けて中を掻き回して地図を探し始めたがなかなか見付からない。午前八時四十五分発の便は午前十時四十六分にシンシナティーに着くが、その中間で時差の時間帯が変わるので、実質は一時間しかかからない。彼の親切な努力にも拘わらず、地図が見附かる前に機はシンシナティー空港に着いた。空港のロビーでは思い掛けなく、空港着の時間丈連絡してあつて大学から学生部次長のリー女史の出迎えを受けた。リー女史は日本では余りお目にかかれない古ぼけた自分の車に、私達と私達の重いトランクを積んで高速道路を大学へ向う。車中でホテルの件を話すと、大学の近くの大学指定のホテルを紹介してあげると云う。東京出発前から頭を悩まし続けた一件はこれで落着である。

ケンタッキー州にある空港を離れると、間もなくオハイオ州の橋を渡つてオハイオ州シンシナティーの市街に入る。河畔のレッドソックスチームの野球スタジアムや、フトボールチームのスタジアムの前を過ぎると、間もなくシンシナティー大学のキャンパスである。車をキャンパス内の駐車場に入れてリー女史の部屋へ行く。リー女史は、早速大学の指定ホテルに電話して、部屋をリザーブし、更に私が京東でリザーブしたシャロンピルのヒルトンインにも自分で電話して事情を話し解約して呉れた。一ヶ月以上前に二部屋を四日間予約してあつたので、当日の午后にな

つてのキャンセルは、そばで聞いて居る私にも心配だった。しかし先方のホテルは快く承知して呉れた。リー女史も少し心配だったのか、受話器を置くとキャンセルはノーチャージでいいと云つて呉れたと、明るい顔で云う。丁子は東京で大学院入学の手続きをすでに終つて居たが、こちらでも又煩雑な書類の記入などで大変である。その間私は、デイー女史の紹介でK主任教授に会い、一八一九年創立の古い大学の広いキャンパスを案内して頂いた。広大なキャンパスに長い歴史の時々建てられた様々な様式の建物よりも私の目を驚かしたものは、後樂園スタジアムよりも広い二ヶ所の学生用の駐車場と、プロ野球のスタジアムの様なスタンドのある学生用の野球場とフトボール用のグラウンドである。

四時過デイー女史の車で大学に隣接する学生寮に案内される。六階建の寮の入口は嚴重なドアで、一人づつ予め渡されて居る鍵を使って入ると、正面の机には屈強な二人の警備員が並んで坐つて居る。ここでチェックを受け、エレベーターで四階の割当てられた個室に入る。ここにも嚴重な錠がついて居て、隣室の友人の部屋へ一寸行く時も必ず鍵をかける。個室と云つても、ベッドは固より戸棚類・炊事室・浴室も揃つて居て日本の標準では新婚家庭二人の住いには広過ぎる広さと設備である。

丁子の荷物を部屋に置いて、デイー女史の車でホテルに

向う。町外れの緑濃い丘のふもとに、トレッドドウェイインは建って居た、芝生の庭にはプールもある四階建の閑静なホテルである。ロビーには人影も無く、フロントでは中年の婦人が一人私達を迎えて呉れる。リー女史とロビーで別れて私達は二階の二つの部屋に落着いた。シャワーを浴びてベッドのカバーも外さないで、その上に横になった私は、早朝から忙しかった一日の疲れから眠り込んでしまったのであろう。姪のドアをノックする音で目を覚まし、時計を見ると七時過ぎである。あわててシンシナティー到着後直ぐ電話することになって居たクリーブランド郊外のコーマン家へ電話する。十年前の夏、ハワイ旅行中に知り合ってから毎月の様に文通を続けて来たマイクル君も母のセル夫人も外出中であつた。電話に出たのは父親のマイク氏で高校の化学の先生と聞いて居たが電話の声は女性的とも云える静かな声である。私の訪問のことは二人からよく聞いて居て五日後の土曜日の午后三時には、間違いなくクリーブランドのホテル迄息子のマイクルと一緒に車で迎えに行つて夕方から親戚や友人の家族達とあなたの歓迎パーティーを開くことになって居ると云う。

好意を謝して受話器を置くと、慣れない電話での英語の打合せが無事に終つてほつとする。翌朝大学へ行く為、ホテルの前のバスの停留所へ行く。東京のつもりで暫く待つても一向にバスは来ない。廻りを見廻してもタクシーの姿

も見えない。時計を見乍らいらして居ると、近くに一台の車が降り、中年の軽装の男性が十七歳位の少年を連れて降りて来た。彼らは車のトランクルームに積んで来た小型の市役所の掲示板の様なものをついで近くの街路樹の下に建て始めた。ぼんやりとその作業を眺めて居る間にも、バスもタクシーも来ない。作業が終つて車の方へ帰つて来たその人に事情を話すと、彼は一たん家に帰つて直ぐ下町迄行く予定なので、そのついでに大学迄送つてあげると云う。大学への途中、彼はシンシナティー大学には私の親戚の娘も通つて居るので、丁子にも是非自宅に遊びに来てほしいと云つて、車が大学に着いた時私に名刺を呉れた。名刺には工事会社のマネージャーの肩書があつた。恐らく彼は好意から誘つて呉れたのであるが、行きずりに知り合つた人の好意も素直には受けられないのが、現在のアメリカの治安の実情であらう。

大学に着いてK教授に音楽学部の中を案内して頂く。教授は警備員の持つ様な沢山の鍵の束を持って、次々に部屋を明けなければならぬ。教授中の教室も、学生達の自修室も、使用中の如何に拘らずすべて中からロックされて居る。大学の構内は道も校舎の廊下も、すべてコンクリートで固められて居て、皮靴の足の裏が痛くなつて来た、昨日からどの位の距離を歩いたのであろうか。次の日、丁子の東京芸大の先輩でやはり大学院に留学中のR嬢に、銀行や

街の中を案内して貰う。途中バスの中で、彼女は丁子に繰返し日本と違う治安の悪さと、それに対する心構えを話し続けた。

翌日、私はリー女史から日本語を勉強して居て日本に興味を持って居るとゆう男子学生を紹介された。人の好きそうな童顔に口髭を生やして居る。日本語で話し始めたが、すぐあなたの英語の方が私の日本語より上手な様だからと、英語で話すことになった。少し遠い耳のせいで余り会話に自信のない私も、米国人の日本語と比較されてやっとな劣等感から解放された。彼に日本に興味を持った動機を聞くと、数年前アメリカでベストセラーになったジェームススクラベルの「ショウグン」を読んだこと、そのテレビ映画を観たことだと云う。日本の鎖国政策についてなどかなりつっこんだ質問をして来る。

次の日は、いよいよ私のエスコートの役目が終わってシンナーを離れる日である。前夜フロントに頼んで置い

たタクシーは、正確に未だ暗い六時きっかりにホテルの玄関に来た。運転手は黒人で助手席にも屈強な黒人の助手が乗って居る。あけやらぬ街を、街外れのグレイファウンドのターミナルに着く。今日はオハイオ州の東南端のシンナーから西北端のエリー湖畔のクリーブランド迄、五時間半の長距離バスの旅である。アメリカの長距離バスは庶民階級の乗物で、バスターミナルは日本の地方都市の駅の雰囲気である。ケンタッキーから来たと云う小供連の若い主婦、空軍の正服を着た中年の女性、老夫婦等でバスを待つ長い列を作る。老夫婦が話しかけて私の時計は日本のセイコー妻のはシテイズンだと云うと、後の中年の婦人は私の家にはトヨタの車があると云う。

バスは白い顔と黒い顔、黄色い顔も乗せてオハイオの広野をひた走った。

(岩淵金屬工業名譽顧問)

修学旅行に思う



算 素 彦

中学校や高等学校で先生が引率して出かける旅行は修学旅行であると推定されるが、其の実態ははたしてどんなものであろうか。

勿論、その中には、学習に資するため、十分実施方法

について検討し、効果を挙げ得るように配慮されているものがあることは信じて疑わないけれども、時々見聞する実態は、遺憾ながら、単なる行楽、名所旧跡の見物、卒業記念、気晴らし程度に考えられているものが尠くないのではなからうか。

親の脛を噛んでいるものが、親には莫大な経済的負担をかけた大事な学習時間を使ってする旅行であるからには、教育の目的に合致するように計画され、実施されなければなるまい。ただ行儀悪く飲み食いの仕放題、土産物買いのみに狂奔し、旅行者のマナーを会得するでもなく、無方針に雑多な箇所を金と時間をかけて歩くだけでは余りに情ない、残念なことと云わなければならない。

もう可成り古いことになったが、仕事の関係で時々あちこちを旅行しなければならなかった頃のこと、山陽線を大阪方面から児島半島の宇野港に向かって走る列車の中にいた。其の車輛の大半は修学旅行の中学生たちであったが、皆一向に外の景色を見るでもなく、或いは下らないことをしゃべったり、菓子をたべ、果ものを剥き、ジュースのみ、トランプをやり、又或るものは居ねむりをするなど、記録一つつけるでもなく、スケッチ一つする者も見当らない。

引率者の先生方は、と見ると、車輛の端の一角に四人が二人づつ向い合って、或は莖を吸ひ、或は汲み交して生徒達とは全く没交渉、一回の説明すらしないのである。

走る列車は明石の日本の標準時をきめる一三五度の標準時子午線のあたりを過ぎる。このあたりで標準時の話でもしてやったら良からうに思ったので、ちょっと隣りの生徒をつかまえて、「君、標準時ということを知ってるか」と質問したところ、知らないというので、地球の自転と「時」の測定法、標準時の実益などの話を近隣の生徒諸君にもわかるように話してやったら、皆大へん興味を持ったらしく、だんだん近くの席から、中には、わざわざ立って聞きに来るのも出来る始末、こちらは大いに張り合いが出来て、「よし、事の序でに先生の代理をしようか」という気になり、標準時測定の一三五度子午線の標柱が、明石の柿本神社の境内に在る話から人麻呂の話、そのうちに見えて来る姫路城の話から千姫の話、大阪冬の陣、夏の陣の話、いつか生徒たちは立って来て、ビッシリ周りを囲んで熱心に聞いてくれる。こちらは益々張合いが出て、相生から山陽本線と岐れて海近くを通る赤穂線についても赤穂義士の話、製塩の話、少し前に戻って造船地帯の話、本線では船坂山トンネルの上の船坂峠は児島高德の故事に関係のあること、その先の三石は日本一の臘石の産地などと、この頃のバスがガイドもそこ退けとばかりに説明をつづけ岡山のあたりが畳表にする蘭草の産地であること、備前焼の話、児島湾干拓の話など、大いに気を良くして弁舌をふるうち、列車は岡山から宇野線に入りいよいよ終点も近くなる。

ふと見ると驚いた。端の方に居た筈の先生方も、何時しか生徒のうしろの方で立って傾聴していたのである。

さて時刻も迫ったので、一同の静聴を感謝し、其の将来の心得の二、三を附加して話を了へたところ、うしろに居た先生が、矢庭に大きな声で叮重なる謝辞を述べた揚句、さらに声を張り上げて、一同に「氣を付け」「礼」と号令を掛けた。外にも何人かの乗客は居たが殆んどは生徒諸君であった。こんなに愉快なことはなかった。長い間、つい、立ち上がったて大声でしゃべり続けた疲れもけし飛んでしまったのである。

何だか自慢話のようになってしまったが、これは私の中学時代、修学旅行で、大へん良い教育をして下さった恩師のお蔭なのである。

私の母校は、今は筑波大学附属高校と云う名に変わってしまったが、昔の東京高等師範学校附属中学校であった。この学校は、先生を産み出す学校の附属だけあって昔から立派な先生方に恵まれ、修学旅行についても昔からの伝統があった。

修学旅行における指導担当は地理の先生であった。無論、クラス担任の先生方も同行されるのであるが……。私が御指導をうけたのは、私が一年に入學すると同時にお茶の水から転任して来られた山本幸雄先生であった。

その教育方針は山本先生以前からの伝統であると思うが、この学校の修学旅行は決して単なる物見遊山とか親睦とか亨楽ではなく、本當の教育の一環として徹底したものであった。金をつかって遠走りすることなく日数にしても、低学年は一泊乃至二泊である。

教育の一環であるから、卒業記念の親睦遊楽旅行などはちがって、各学年一回実施、当時は一年は、佐原から船で利根川を下って銚子、二年は水戸、筑波山、三年は箱根、伊豆、四年は甲府、諏訪、木曾、名古屋、浜松、静岡方面、五年は郡山、碧梯、今津、新潟方面。尤もこれは固定したものではなかったが、四年・五年も実施したということは、「この学校は高校の予備校ではない」という確手たる信念に基いて教育が行なわれていたからであった。

「旅行要録」という、研究テーマを掲記して概略の手引を示した薄いパンフレットに基づいてあらかじめ各自で研究をする。たとえば佐原から銚子の場合、交通、地形、人文、香取神宮、伊能忠敬、利根川流域の地形、水産物、外洋、河口の海藻介類魚類、海浜植物の種類・特徴、犬吠崎附近の砂岩及其利用、砂石中に含まれる化石、海浜に打上げられた石炭、犬吠崎燈台、銚子無線電信局、醬油の醸造などの項目について予め各自、先生の助言の下に参考資料により研究し、旅行中は現地でも更に先生の説明指導をうけ、毎晩、宿では研究発表、質疑、討論を実施した上、あとで

各自が研究の結果の論文と紀行文、記録、スケッチ、歌、俳句なども添えた旅行記を作成して提出するのであるが、中には実に堂々たる大論文と名紀行文をまとめた名著もあった。当時、未だラジオもない大正八年、無線電信の原理の研究とモールス符号を覚えるため大いに勉強した懐かしい記憶がある。東京から佐原までの鉄道沿線の耕作状況を目を皿のようにして記録し、山林を注意し、先生の指導により駅の土場に集積してある物資によって、附近の産業や其の集散状況に注目することを教えられ、河川を渡れば、其の上流下流の流域の状況、その水源などにも思いを及ぼすことが習性となって八十歳の今日まで乗り物に乗ってても常にあたりに興味を持ち、簡単なスケッチに歌や句を添え

旅の苦楽のことども

この稿がこの雑誌に載って刊行になる頃は、多分ヨーロッパに出張してしよう。この旅は七月下旬から続く。韓国での学会で研究発表の後、その足でまずトルコに赴く。トルコを訪れるのはこれで二度目である。この旅は暑い季節に入っているのです、恐らく快適というわけにはいかないかも知れない。

るのが楽しみとなってしまった。

昔、大和田建樹作詞の鉄道唱歌を愛唱し、今日でもよく覚えていたが、せめてあの程度でも沿線の知識があったら旅は一層たのしくなるのではなからうか。

歴史も知らず地理も知らず、特産品も人情も知らず、画を描くべもなく、句を作るでもなく、ただ飲んだり食べたり、漫然と見物するだけというのは何とも気の毒な気がしてならない。私は中学時代の毎年の修学旅行のお蔭で、今日に至るまで本当に楽しく有益な旅行が出来ていることを、心からありがたく思っている次第である。

(本会評議員 元宮内官)



古 田 紹 欽

その後どう国々を廻るか、今のところきめてはいない、何んでも見てやろうといった好奇心はもうこの齢になっては余りない。駆けづり廻るような忙しい旅はもうしたいとは思わない。贅沢を望むわけではないが、ささやかなホテルに泊って、ワインを飲み、ビールで喉をうるおし、しみりと国々の料理を味わいたいものだと考える。

食い気も衰えがちであることを思うと、食い気の楽しさを求めて海外旅行が出来るのはここ二、三年のうちのことではないか。

テーブルに運ばれた料理を見ただけで、もう腹がふくれるといったことになっては旅の楽しみはもう少ない。折角のおいしい料理にも箸をつける気にもならないということになっては、もう旅は疲れるばかりである。

楽三ということが確か何かの本にある筈である。楽しみとするものが三つあるという説である。それは眼に見る楽、耳に聞く楽、口に食べる楽を指す。人間の楽とするものは凡そこの三つに尽きよう。もつとも酒を嗜むものに取ってはもう一つ呑むということが加らないと困る。これまで色々の国々を廻ったが、その国々の酒を呑んだ楽しみは忘れない。

もう今から三十年も前のことになろうか。イタリアでキニールのカンパリを初めて呑んだ。その頃日本では銀座のバーでもまだカンパリは置いていなかった。イタリアから幾つかの国を巡ったがこの酒をずっと携行したことを忘れない。この酒はもう珍らしくはないが今も愛飲し続けて、来客があればこれをよくすすめる。

一時のことであるが、かつてコーヒー中毒にかかったことがある。毎朝それを呑まないで、気がハッキリしないようなことがあった。意識的に随分困ったことになったと

気付いたので、それを克服することが出来たが、ただおいしいコーヒーには魅力を感じる。海外に旅行しておいしいコーヒーにめぐり合った時は、生きかえったような気持ちになることがある。

コーヒーには好みのあることながら、ただ減多にそのおいしいコーヒーに出会わないのは、おいしいその店を旅行者では見つけられないことのためかも知れない。コーヒーを呑んで胃の具合・調子が気にかかるようでは体調のよくない証拠でそんな時は自分でよく警戒することが必要である。トルコではまた強い刺戟のコーヒーに出会うのではないかと思うが、余り刺戟の強いのは自分の好みではない。

紅茶談義もついでにここでしたいが、いささか話しは面倒になるのでそれは別の機会に譲ろう。ビールについてもまた同じである。

ビールについてはうまいその話しをするよりはまづい方のその話しをした方が早い。水のよくない所ではどんな科学的操作が加えられるにしても、うまいビールを作るには条件的に至難である。食いの呑みものについては見っともない程意地汚いものであるが、これはどうやら知識人に限ってそれが一段と強いらしい。

談義が少し脇道にそれたが、旅は上述のように楽三を基本にして出来る限り楽しみを尽くすことであらうが、旅を重ねて見てこの楽三すら満足に叶えられたことはまづめづ

らしい。旅はそうは期待通りに誰にでも楽しみを与えてくれるものではない。却って時には苦勞を背負い、疲れて帰るといふことにもなる。

団体で旅行をし、仲間同志が喧嘩などして気まづい思いをして帰ることになったら、それくらい愚の骨頂はない。

近頃、自分の体調を自分で量ることがむづかしいことになった。従って独り旅は時に心細くなったりすることがあるがそうかといつて連れがあるといふことは、何んとなく窮屈な感じをもつ。勝手なもので都合のいい時は一人でいて何か心配ごとがあると連れのものに寄りかかろうといふわけである。旅を計画する際いつもそんなことをあれこれと迷つて考へる。

外国への出張となると飛行機に頼る外はない。空を飛んでは国々の風物など見られるわけはなく、時間的な能率的なことを計算する限り飛行機に乗るといふことになるが、一つの国に着いたらその近くの国々に行く場合、列車とかバスを利用するに限る。国々の違った風景に親しく接し得て、見聞を身近かに深めることが出来て初めて旅をした甲斐が思えるのではなからうか。何時であつたかドイツでコブレンツからハイデルベルクに自動車で行く途中、車の運転手が地図を読み違えてか田舎道に迷つたことがあつた。丁度昼飯時になつて予定もしなかつた村で食事をし、部落でワインを作っている家に招かれ手造りのワインを馳走に

なつたことがある。

旅では殊に馴れない外国では珍談奇談が伴うことが有りがちであるがそれはここではふれない。

さて、今度のヨーロッパ行では何を楽しみとするかである。暑い季節の旅だけに気候の上ではまず楽しみは期待出来ない。レストランでメニューを見てさて何を注文するかとなるとわからないものが多くてまず困る。またそんな思いをして食べたいもの、飲みたいものを見遁して帰ることになつたら恨みがのころう。尤もお金もろくにないくせに慾ばかりかいていては、旅は決して現実に満足な思いとなるわけはなからう。

昔々、子供であつた頃のように親から僅かばかりの小遣いを貰つて修学旅行に胸をふくらましたような思いはもうこの年になつては残念ながら出来ない。旅は楽しいものながらむづかしいものであることを近頃になつて殊に感ずる。

(本会評議員 勸松ヶ岡文庫長)

山の贅沢

松平直寿

今年のゴールデンウィークは丸一年振りに山にでかけた。私どもの七年制高校は、上越の谷川岳に山小屋を持っていくが、戦後新制大学に変わってからも引きつがれて、開設以来五十五年、山岳部の現役、OBの手で維持管理されてきた。それが珍しいというので、テレビ局が取材することになり、OB十数人が参加した。

午前十時、土合山の家で取材班と合流し、まだビッシリ雪で埋まる湯檜曾川沿いの道を小舎に向う。

取材側はなるべくありのままを撮りたいというので、到着早々の小舎掃除もつき合って貰い、午後は皆で芝倉沢の雪渓まで登ってスキートのトレーニング。テレビ局も頑張った重い機材をかつきあげ、万一のブロック雪崩にも安全なように雪渓の端にカメラを据える。撮影は全く他のパーティも来ず、若いOBの一人がカメラの前でクレヴァス(雪渓の割れ目)に落ちるといふご愛嬌までついたが無事完了。

その夜の食事は見ごたえ、いや食べごたえがあった。何しろ、近頃はやりの「男の料理」の元祖みたいな連中が集まって、かわるがわる大きな薪ストーブの上で妙技をふる

うのだから大変だ。

一人は小舎の裏手の雪をかきわけてフキノトウを摘み、サツと油でいためてフキミソを作る。一人はわざわざ東京からかついできた金目のアラを、ていねいにアクをとってスマシ汁を作る。中華風あり、ドイツ風あり、どれも一応サマになっていて、取材班も呆氣にとられた様子。

なかば雪に埋まった山奥の一軒家は、こうして賑やかに更けていった。取材班も、こんなタププリ録音をとったのははじめてという程の頑張り。(尤も、後で聞いたところでは皆アルコールがいい具合にまわっている、折角いい話がとれたと思うそばから別の人間がぶちこわすようなことを云うのでキリがなかった、というのが真相らしいが。)

翌日は取材から解放され、思い思いにスキーをかついだり、ひきずったりして国境稜線近くまで雪渓を登り、晩い春山の一日を楽しんだ。

一口にOB連といっているが、実は七三歳から二四歳まで、それこそ半世紀にわたって平均してバラついているのである。しかしこういふところへ出掛けてくるOBは年をとらない人種だから、スキーも山登りも、ほとんど一緒に楽しんでる。

勿論若い方は素知らぬ顔をしながら適当にピッチを加減してくれているし、不必要に年寄りの面倒は見ない、年寄りには年寄りで、自分のスキーは自分でかついで、それで自

分に満足して一緒に山登りを楽しんでいるのだが。

山登りのよきは、年をとっても年相応に振舞えることであり、また年相応にさまざまな味わい方があることだろう。しかも、こうした思いやりのある仲間と、それぞれに山を楽しむことができるということは、何と仕合せであり何とぜいたくなことであらうか。

(本会評議員)

途中下車

—安上りの小さな旅

生山智己

勤め人になってからかれこれ十年近くになる。自宅から事務所までの毎日同じ通勤経路で、たまには違う駅で途中下車したくなる。まして、別に自慢ではないが、中学、高校、大学、会社と通学通勤のルートが殆んど変わっていない。だから、ここ二十年程度の沿線の変化がよくわかる。

まず駅舎、それに車両が現代的になりマンションの林立が目立つ。住民が爆発的に増えた。都市化には目を見張る。

また不思議なもので、週日背広にネクタイのいでたちで見る車窓の景色と休日のリラックステイルで見えるそれとは違って映る。スーツでは仕事の延長という気がする

からだだろう。乗客の表情も明らかに違う。

そんなわけで、休日、ふだん通り慣れている通勤途中の駅で下車してみた、定期がきいて交通費がかからないのもうれしい。

カメラ片手にブラブラ歩く。気に入った構図にぶつかればシャッターを押す。後日の記録用だ。駅員や街行く人々の表情もノンビリしている。別に変なことをしているわけではないけれど、見知らぬ街を歩くのは他人の目が気にならないのでありがたい。沿道の店をひやかしながら気に入った商品があれば小額の買物をする。文房具屋、本屋、これらは衝動買いをしてもたかが知れている。買わずに出るのが気まずければ、鉛筆一本か消ゴム一個、文庫本一冊でも買えばよい。店の人と話が合えばチョット世間話、思わぬ情報がきけたりする。お茶屋では、お茶と茶菓子を出してくれるのはうれしい。

気が向けば涼みがてら映画館に入る。場末の映画館はロードショー館ではないから料金も格安、観客もまばら、往年の名画をゆったりと見る。うす暗い席で静かに弁当を広げるのもいい。街の定義は、映画館があるかないかだなどとの友人との議論を思い出す。

郵便局も一つの指標だ。電話嫌いの私は、郵便配達夫から届く郵便物にロマンを感じる。手紙は、隣町からのこともあるし遠く異国からのこともある。昔は配達夫が鈴を鳴

らしなが届けたときくが本当だろいか。

歩き疲れると喫茶店でコーヒを一休み。道行く人々をぼんやり眺めているのは気が安まる。店に用意された新聞や雑誌で世事を知る。

チョットした街なら公園や寺、それに神社といったものが必ずある。わざわざ金と時間をかけて郊外の公園に行かなくても用は済むし、初詣でにしてもむしろ地元の氏神である近所の神社に行くべきなのだ。

時間があれば、町の公民館や集会場へ立寄ってもよい。スポーツ教室だの文化講演会、バザーだのと結構いろいろ催物をやっている。地域のコミュニケーションが少なくなりつつある昨今、これらの活動は大切なことなのかもしれない。以前は隣組だの町の青年団、子供会といった組織があったと思うが、今は殆んどなくなってしまったようだ。昔からのよいものは、これに限らず残しておくべきだろう。都市化イコール人間疎外ではお粗末だし、文化は育たない。生活にはうるおいがなければ。

そうこうしているうちに日が暮れ、私は家路につく。普段は夜遅く帰宅するため最寄駅の商店街はシャッターがしまっているの、夕方の街の様子を久しく忘れていた。家にとどりつく坂道を上る時、各家庭から魚を焼くにおい、カレーの香りなど夕飯の料理のさまざまなにおいを感じる、人間の生活は昔から同じことのくり返し、さしたる変

化はないのだなと思う。

こんなことを考えながら、私の小さな旅は終る。

(神奈川県会員 会社員)

七福神詣での出会い

加藤嘉三郎

旅は友をこしらえる出会いのよき機会である。私はここ数年間国内の団体につとめて参加し、昨年の如きは三十回に達してゐる。この旅によき友と出会い、日本弘道会に入会して頂いた方は十余名にもなり、現在弘道会を通じて親しきよき交友をかわしている。ここに御紹介する方は、昭和五十九年一月隅田川の七福神詣で出会った方である。

昼食時に浅草雷門前の食堂で隣り合せとなり、彼はコップ酒、私はカンビールを呑みながら七福神詣のことどもを話合つたことが始まりで親しくなった。同氏は横浜市に本社のあるアメロイドK、K、(液体科研株式会社)の代表取締役会長中里幸次氏である。東京一商第二回卒業生で日本郵船に入社し、新嘉坡を初めとして東南アジア各地に勤務せられ、現代でも同方面に於て活躍されている。

同氏は仏教に造詣深くお寺参りが趣味である。従つて単に風景をめでのなく神社仏閣が行程になければ行かれ



会祖の菩提寺・養源寺門前にて
(左から中里氏、筆者、岩崎氏)

ない。

以下御参考迄に同行した旅行を列記する。

- 一、昭和五十九年三月十日(日帰り)
浅草七福神と湯島天神詣
- 二、同年三月二十日(日帰り)
高尾山薬王院と谷保天神詣
- 三、同年五月一日(二泊)
大和生駒信貴山毘沙門天王と長谷寺詣
- 四、同年六月十九日(日帰り)
取手利根川七福神詣
- 五、同年九月廿七日(日帰り)
長瀬七草寺霊場めぐり

六、昭和六十年一月四日(二泊)

南伊豆七福神詣

七、同年一月十日(日帰り)

湘南(逗子葉山)七福神詣

八、同年一月廿八日(二泊)

東京湾観音詣(佐貫海岸)

九、同年二月廿五日(一泊)

信州鹿教湯温泉の安楽寺(国宝八角三重塔)前山寺重文

三重の塔見学

十、同年四月四日(二泊)

京都東山青蓮院、東大谷廟詣。

御本山覚信尼公七百年忌法要に参列

三河大浜騒動関連の寺でら

十一、同年四月二十日(一泊)

高遠の桜、絵島屋敷、駒ヶ根高原散策名園光前寺参り

十二、同年十月十八日(一泊)

奥信濃飯山七福神詣

十三、同年十一月二日(二泊)

若狭より山陰海岸めぐり

敦賀気比神社、小浜明通寺(三重塔)

多田寺妙楽寺、蘇洞門めぐり

羽賀寺(十一面観音) 天の橋立文殊堂、

香住の大乗寺(通称応挙寺)

十四、昭和六十一年一月十二日（日帰り）

箱根七福神詣

十五、昭和六十一年五月廿一日（二泊）

信州上田大法寺（国宝見返三重塔）

中禅寺、竜光院（山菜料理）

修那羅峠の石仏群

（備考）

七福神の（一）布袋は度量、（二）恵比寿は律義、（三）大黒は裕福
（四）毘沙門天は威光、（五）弁天は愛敬、（六）福祿寿は人望、（七）
寿老人は寿命の七福がある。

七福神めぐりの案内書としては大石真人著七福神めぐり
全国ユース。（緑書店発行）がある。

日本七福神協会は東京駅八重洲出口、国際観光会館一階
藤田観光内にある。

このところ中里氏が御仕事が多忙であるのと、私は足腰
が悪く温湿布療法をやっており温泉がよいとの事で、箱
根のリゾートホテルの宿泊券を購入したのでその方を利用
してゐるから、同氏との旅行はこの処御無沙汰している。

しかし、今秋紅葉の季節には湖東三山めぐりを御約束し
てゐるので、折角養生して楽しい旅をし度いと念願してい
る。旅程は彦根を振り出しに琵琶湖周辺の御寺めぐりであ
る。西明寺（三重塔）百濟寺（各園）金剛輪寺（三重塔）石
山寺、三井寺、堅田の浮見堂、海津の大崎観音、浄真寺

（木の本地蔵）、渡岸寺（国宝十一面観音）、長浜大通寺（襖絵）
等々。

最後に旅の思い出として附記するのは昭和五十一年九月
旧制高校OBで行った欧州寮歌の旅である。ライン河下り
の船上に於いて盛大に寮歌祭が行われたが、その時同行せ
られた岩崎晶・藤出三郎・松本孝二の三氏が計らずも弘道
会員であった事である。毎年一月一高OBの玉杯クラブで、
新年会を開き旧交を温めてゐる。本年度で満十年であった。
真にくしき因縁と云ふべきである。

私はこの際弘道会員に申上げ度い、若し旅で知り合
いとなられた方があれば、年千五百円の会費を自弁し
て弘道会誌を贈り、本会員同志としてのよき交友を持
たれることをおすすすめする

（本会評議員・岡崎八丁みそ役員）

南房総の旅

小沢秀吉

私は今年一月喜寿を迎えましたが、一緒に住んでいる娘
家族から喜寿のお祝にとて、南房総半島の旅を案内して
もらいました。

時は三月の末、東京にはお彼岸明けの二十三日に大雪が

降り底冷えのする春未だしの季節でした。私達の三日間の旅行中は天気にも恵まれ、房総半島の沖合を流れる黒潮のおかげで暖く、列車やバスからの眺めの美しさに魅せられました。黄色い菜の花を始め色とりどりの美しい花畑、青葉若葉に包まれた山野、広大な太平洋、白砂と岩礁美、自然の変化に富んだ景観を楽しみました。

初二十五日、行川アイランドを見物しました。百羽ものベニフラミンゴが、ワルツマーチのリズムにのって舞い踊る姿の可愛らしさ。次に高さ百米程のくじやく山の頂から、数十羽のクジャクが次々と滑空するのを見る。又、飛ぶのが苦手なホロホロ鳥が百羽ほど青空を行進する。こんなに上手に芸が出来るようになるのを知り感嘆すると共に、何事も特訓が大切と人間にも共通するように思いました。その夜は鴨川グランド・ホテルに泊りました。

ホテルのロビーの一隅に図書棚があり、その中に偶然にも『偉人・西村茂樹先生』と題する小さな本を発見して一読しました。千葉県中学校の副読本として、千葉県の生んだ偉人、私達の弘道会の会祖西村茂樹先生の一生をわかりやすく書いてありました。千葉県の青少年教育の為ばかりでなく、このような良書は日本全国の青少年にも読ませてもらいたいと思いました。

翌日、鯛の浦（妙の浦）に行き遊覧船に乗り大きなマダイを見た後、近くにある日蓮上人の生まれた地を記念して

建てられた日蓮宗の総本山誕生寺を参詣。次に、清澄山の山頂近くにあり宝亀二年（西暦七七一）創建と伝わる清澄寺を参拝しました。清澄寺は、日蓮が天福元年（一二三三年）十二才の時初めて修業に入った寺です。三十二才一二五三年、清澄山で『南無妙法蓮華經』を唱えたのが立宗の始りといわれています。

それから、鴨川東条海岸に広がる鴨川シーワールドに行き、アシカ・イルカ・白鯨などの愉快なショー、五米以上も飛び上るダイナミックなシャチのショーを見て、一緒に見物にきていた子供達のように楽しい心地になりました。

三日目は、太海フラワーセンターを見物。美しい花壇、広大な温室内の熱帯植物、四季を通じて咲く花は約二千種とも言われます。館山に出て特急に乗り約二時間で上野駅に着きましたが、内房は外房と景観がガラリと変わり、君津、木更津、五井、千葉には鉄鋼、電気、石油化学等近代工業の巨大な工場群が立ち並んでいるのには驚くばかりでした。今から五十余年前の夏、学生時代に友人と内房の浜金谷に一週間海水浴して遊んだことがあります。当時を思い出し、現在の変容に今浦島太郎の感を深くしました。

このたびの南房総の旅は私にとって楽しい思い出の旅となりました。

（東京都会員 元三井物産勤務）

学生時代の乞食旅行

野 口 元

私は昭和六年七月京都市及瀬田川方面に旅行した。當時私は旧制高等学校の二年生であったが、全国高校の柔道、ボート競技の決勝戦がそこで行なわれるので、それ等の応援団の受け入れ準備の爲めの先発隊四名の一員としてであった。

一般に応援団は、一校につき二三名乃至数名が随いて来るのが普通であるが、奥州くんだりから遠路遙々百名近くの大部隊が、大旗を担いで現地に乗り込むことは、異常であり又壯観でもあった。

京都の武徳殿では東日本、北海道代表の我が校と四国、中国、九州及び中部、近畿、北陸代表の間で決勝戦が行われたが、柔道は流石に西日本勢が強く我々必死の捨身戦法も歯が立たず恨を呑んだ。転じて瀬田川に陣を移した。當時世の中は所謂昭和維新前夜で、極めて深刻な不況のどん底にあった。瀬田の町ものんびりしたもので、有名な唐橋の上も交通量は稀であった。

先づ宿舎を探しに町を歩いた、瀬田川の左岸は膳所、右岸は有名な石山寺である。その門前には大きな土産物店が

十数軒並んでいたが、殆んど不景氣の爲め休業中であった。その中の一番大きな二階建の廃屋同然の家を一軒借りた、家主も奥州から学生さんが大勢来て呉れると喜んで安く貸してくれた、寝具としては土建の飯場人夫用の一日二銭の煎餅布団百枚を借り、それに予め駅留めで送ってあった学生寮の蚊帳六十張を被って寝ることにした。食事は近所の仕出屋から握り飯と沢庵を取った。

百名近くの学生は、上手に統制を執らないと鳥合の衆と化し、小人閑居して不善を爲すものであるから、四六時中何か作業をさせることにした、毎夜不寝番を置き午前三時起床、真つ暗闇の中を石山寺に必勝祈願をするとか、その後日の出礼拝、瀬田川での禊、水練等々又大旗を唐橋の欄干に樹てることも相当の作業であった。その他水流速度調査、競艇の摩擦抵抗の測定、出場各校の技量の探查、スピード、タイム、練習状況の偵察等、受持を決めて各校毎に行った。夜は隊伍を組み、太鼓を打鳴らして、町内をデモ行進をする。これは早朝、夕食後行つたが、狭い町であるから各校の合宿所は到る処にあり町の名物になった。

斯くて破竹の勢で勝ち進んだ我々は、遂に日本新記録で二年連続優勝の栄冠を勝ち取り、その夜は小雨降る中を一晚中狂喜乱舞。町内を母校一色に塗りつぶした感激は未だに忘れ難い。

祝勝会の跡始末をして残つた者八名。蚊帳を梱包して学

校宛送り返し、身軽になつて琵琶湖周遊をした。戦済んだ後の近江八景は、又格別の風趣があつた。

そこで、一同相談して関西旅行をしようといふ決めた。汚いボロ紋付の学生であるから、一種の乞食旅行である。

先づ京都に出た。比叡山に登るべくケープルカーに乗つて山頂駅に着いた。既に午後八時頃である。駅の売店で菓子を食べたり、サイダーを呑んだりして今夜泊るべき宿を相談している時、吾々の一人が暗闇の中を登つて来る僧の一人を見付けた。彼は直ぐその僧と交渉して来ると言つて出て行つた、結果は如何にと一同は待つたが仲々戻つて来ない。窓から前を眺めると、京都の町の灯が闇の中によく見える。彼は僧を前にして、拳を握り挙げて何やら演説をしているらしい。暫らくして彼は憤然として戻つて来て曰く「坊主共は宿料のことばかり説明してガマツクて話にならん」と言ふ。それでは野宿するより仕方がない。駅は最終電車で閉めると言ふ。吾々はベンチに蚊取り線香を焚いて、一夜を明かすことになつて了つた。

翌朝、一番のケープルカーが登つて来た。その時、彼は腹が減つたからこれで下山すると言ひ出した。一同は折角ここまで来たのだから延暦寺位は参詣したらと言つたが、彼は肯んぜずこれに飛び乗つて了つた。仕方なく一行も彼に同調して下山した。正に「比叡に登つて延暦寺を見ず」といふ結果となつた。一行は一膳飯屋に飛び込んで、ピラ

ミッド型の皿御飯を食べた。

それから奈良に行つた。奈良温泉が開業したばかりだったのでそこで入浴、久し振りに戦塵を洗ひ流し脱衣場で昼寝してから東大寺拜観に出掛けた。入口で一人が拜観料は払はぬと言ふ。そこで寺側と議論を始めた、聖武天皇が国家財政で国家鎮護の爲めお建てになつたお寺を千年以上も拜観料を取り続けるとは何事だとわめいている。彼は遂に拜観せず、大仏殿の前の石畳の上に大の字に寝て我々の出て来るのを待っていた。

大仏様の裏に、木彫の生地 of 盞の仏頭が飾つてある。説明に曰く「江戸時代東大寺再々建の際資金不足の爲め未完成に終つている、どうかこれの完成の爲め喜捨を願いたい」とあつた。実はその数年前、私が中学の修学旅行でここに来た時もこの立札があつた(因に数年前私は子供等を連れて此処を訪れた時も同じ立札が建つていた。即ち五十年前と全く同じである)。東大寺はあの木彫の仏頭を完成させる意志がないのではなからうかと疑いたくなる。

元禄時代から二百年以上募金をして、一体の仏像が完成しないのでは、喜捨も払観料も一体どうなつていいのか判らないと思つた。又母を伴つて石山寺に参詣したことがある。近江八景、瀬田川も昔の儘であつた。襖をしたり水練をした場所もあつた。紫式部源氏の間も同様であつたが、門前の土産物店は総べて見違える程立派になり数も多くな

つていた、瀬田川に架る橋も何本か増えて活き返ったように感じた。そして現在、乞食旅行をした八人は私の他一人を残して総べて鬼籍に入った。

旅は山紫水明を賞するだけでなく、そこに培われた歴史的风土のあるところが、いつまでも印象に残るように思われる。

(東京都会員・医師)

飛驒に信濃に

木下一雄

大正三年十月、七十有余年も前になる。わたくしは、長野県松本から鉄道を乗換え、島島(安曇)下車、全徒歩にて日本アルプス横断、日本海富山市に至る行脚に出た。島島から平坦三里、それより山路を上ること一里、徳本峠の頂上に達した。二四三五米、突如として雄大なる穂高連峰に直面した。あまりの大絶景に言葉も出ない。

後年、わたくしは富士山に上り、頂上の噴火口のお鉢廻りをして、剣か峯の尖端に直立して、大地を見晴らした。それから大戦後、(昭和二五年)アメリカの軍用船に便乗して、太平洋の真中で、甲板から大円を描く水平線を見晴したことがある。大地球が想像された。

徳本峠に別れを告げ、峠道を下ること一里、さらに平坦

一里、梓川に出て上高地に着。上高地は温泉宿一軒だけ。前年の焼岳噴火で出来た大正池を見晴して、焼岳が聳える。温泉は山から一本の竹を通して流れてくる。アルプスの有名な山男嘉門次の話を聴く。

第二日、上高地出発先ず焼岳(二四五三米)にのぼる。裾からしばらくの間、紅葉が目覚めるように美しくい。間もなく火山の肌、脚がすべり易い。危ない。頂上に近く峠である。日本アルプス飛驒山脈の脊稜である。飛驒山脈の尾根はこれから南へ乗鞍岳(三〇二六)北へ穂高連峰(三〇九〇)槍ヶ岳(三二八〇)と連綿する。

峠で左脚一步は岐阜県飛驒、右脚一步は長野県信濃である。

飛驒の国 信濃の国の 国境

撫子咲けり 飛驒に 信濃に

焼岳の飛驒の斜面を下る。蒲田川の溪流に沿うて行脚を続け、夕暮、温泉神坂に着、まことに淋しい山路の一軒家、旅帳を見ると、数日前のところに碧梧桐の名があった。

第三日、神坂温泉を出発、行脚を続ける。蒲田川から高原川の上流に出て神岡鉾山に出た。それからは山沿いの街道、一方は高原川の流れに沿ひ、歩くばかり、第四日、歩くばかり、神通川と宮川と合流したところ、鮎の豊漁を眺めて、一直線、神通川に沿うて遂に富山市に着、長野県島島からであるが、本州を徒歩で横断したこととして嬉しい

次第であった。

わたくしはこの行脚で、長距離を歩くことの秘訣を知った。百里の道も一歩という諺があるが、実にその一歩一歩こそ、全行脚を成功させる大本であった。わたくしは、この時の行脚に、一歩の歩幅と、時間を定めておいたものがあった。実に時計の一分一分が、全行脚の基準になっていたのであった。

ところが、わたくしは一九六九年（昭和四四）全く仰天した。地球と月との距離は、平均して三十八万五千キロ（地球に近い点では三万六千キロ、遠い点では四〇万七千キロ）ところが一九六九年七月十六日、午前九時三二分（日本時間、同日午後一〇三二分）アポロ一一号は、ヒューストンを飛び、七月二〇日、午後一〇時五六分二〇秒（日本時間、七月二一日、午前二時五六分二〇秒）アームストロング船長の第一歩が、月面に印されたのである。三十八万五千キロの行程が、秒を起算して計画されたのである。

（東京学芸大学名誉教授）

研修旅行のご案内

鈴木貫太郎翁（本会理事・鈴木一氏ご尊父）は、昭和二十年四月日本民族が滅亡するか残るかという死活の運命を託されて総理大臣を拝命、終戦の大業を成就されたことは国民斉しく銘記しているところである。

その偉人を生んだ水と緑の町（せきやと）関宿を訪ね、『鈴木貫太郎記念館』を見学する行事を左記の通り計画しましたので会員多数のご参加をお願い申し上げます。

なお、準備の都合もありますので九月十日（水）までに本会事務所あてに電話又はハガキでお申込み下さい。

記

- 一、月 日 九月十九日（金曜日）
- 二、目 的 鈴木貫太郎記念館見学
- 三、参加費 一人千円。昼食の用意あり。
- 四、乗 物 貸切バス
- 五、集合場所 東京駅南口側丸ビル明治屋横
午前十時迄
- 六、解 散 東京駅八重洲口午後五時 予定

海女の口笛



山岡俊明

能登船倉島^{ノトウボロ}

紫陽花の紫が深まるころ、東京駅の構内で身軽な旅したくの旧友に行き合った。この三月に某県立高校長を定年退職した彼は、白くなった髪に手を当てながら「金沢から能登路を気儘に旅行してくるよ、輪島まで行ったら船倉島に渡り、海女のエゴ採りを見てくるつもりだ。君がよく話していた海女の口笛が聞けるといいのだが、また、それを楽しみに行ってくるよ。」と言う。

船倉島は輪島港の北方約四八キロメートルの海上にある海士の島である。「八十八夜ヨリ海士一統島渡リ秋彼岸終リニ地方へ帰申候、稼ノ義ハ鮑エゴ和布類取揚申候」(『天保申届書』)と記録され、今も海士の専有漁場で、六月から九月まで島に移り住んで鮑やエゴ採りに従事する。

エゴ(恵湖海苔)は紅藻類イギス科の海藻で、ホンダワラ類などに着生し、軟かく紅色で食用ならびに寒天の原料となる。船倉島ではアワビにつぐ重要な海産物である。このエゴを採るには夜明けとともに舟で沖に出かけ、海女は五尋(約九m)以上の海底に潜って素手で採取する。海藻を

掻き分けて根限り作業し息が切れそうになると、腰に結んだ命綱を振って合図をおくり、舟上の男に綱をたぐって引き上げてもらう。すべて一息のつづくかぎりの作業である。

海女の口笛

エゴ採りの海女は、最深一五尋、潜水時間で二分も潜れるというが、五尋以上も潜るには口中に軽く海水を含み、作業中にこれを飲んだり吐いたりして息をととのえるという。水面に浮かぶ時に海水を細く長く吹くので、海女の潮吹きという言葉がある。潮を吹きおわると船端に手をかけて、口をつぼめて、ゆっくりと細く長い息をする。この呼吸調整を海女は「息をつく」「息をこさえる」などという。「ピユウ・ピユウ」という息つく声を海女の口吹と表現している。

海女は「口笛を吹くと気がせいせいして元気がでる」というが、四十年近い歳月を教育一筋に励んできた友人にも、息つくひとときが必要なのではあるまいか。「船倉島には是非立寄れよ、ながいことご苦労だったなあ。」「あゝ、必ず寄るよ、今度の旅で予定に入れたのはここだけなん



浮世絵海女之図

だ。」笑をうかべて立ち去る友人の後姿を見送るうちに、私もそぞろ旅心が生じてきて、数日後には永年の勤務地であった房州に向けて出発したのであった。

房州白浜

房州の海辺の村々では、砂浜に群生するはまゆう（浜木綿）が純白の花を開く夏の季節になると、海女のかづきも一段と活発になる。なかでも房州一のあまどころとして知られる白浜には、七百人もの海女がいて磯浜は活気に満ちている。

白浜は房総半島南端に位置する人々約八千人の農漁村で、遠い昔に紀州漁民が移住して開いた土地と伝えられ、平安初期に編纂された『和名抄』にも「安房郡白浜郷」と記載

された古村である。また、潜水漁業の歴史も古く、八世紀初頭の帝都であった奈良の平城宮址から「上総国安房郡白浜郷戸主日下部床万呂戸白髪部嶋輪調陸斤参拾条 天平十七年十月」と墨書した木簡が発見されている。この木札は天平十七年（七四五）十月に、白浜郷の郷戸主であった日下部床万呂に属する白髪部嶋が税として斗鮑六斤を貢輸したことを記したものである。

おおあま

清少納言は『枕草子』に「うみはなほいとゆゝしとおもふに まいてあまのかづきしにいるはうきわざなり」と述べ、女のかづき（潜水）はさぞ苦勞が多いだろうと語っているが、白浜の海女は潤達でいつも明るい。

今度の旅でも、おおあまとよばれる鮑採り専門の海女を尋ねたところ、大声で「今年も鮑つきがいい」という。舟からあがって海女小屋で暖をとりながらも、仲間と獲物や息の長さを論議している。房州では鮑を採る海女を、贅海女あるいはおおあまと呼んで、石花菜やもく（肥料用の海藻）を採る海女と区別している。息の長いおおあまは、五尋以上を二分間ぐらい潜り、ひと夏の稼ぎも随分と多く財布は女達にぎっている。そのせいか、白浜の海女はあけっぴろげで、いつも大声で話をする。何の屈託もないのである。

かづきの装い

喜多川歌麿は房州を旅行して、海女のかづきに惹かれ

「鮑取り図」の作品を残している。浮世絵では海女がイモジ一つで裸潜りをする様子が描かれている。イモジはイソコシマキと違って三尺二巾に紐をつけたものである。明治の中頃になるとモグリジバンへ（厚めの襦袢）になり、今日では簡易ウェット・スーツが流行している。

お、お、あまは、今でも手拭を被り、晒の襦袢を着て潜る場合が多く、その純白の装いが空の蒼、海の碧に融けて旅情を慰めてくれるのである。

はらいき

明治の歌人菊地剣は「風さむき布良の荒磯にさざえとる海女の口笛波間にひびく」とよんでいる。布良（めら）は白浜に隣接する漁村で、青木繁の油彩画「海の幸」で知られ、林美美子は繁の生涯を描いた「夜猿」の一節で「布良」というところは、万葉にも歌われている土地で、黒潮の流れる太平洋の海の色はまるでピロードのようだと言き、空

想家の繁は胸の中に想像の海潮音を描いてたまらなく描きたくなっていた。そこへ行けば、何か大きなロマンチックな画材と希望が自分を待っていてくれるような気がした。」とかいている。

この布良でも、日常「海女の口笛」といういいかたをするが、船倉島では口笛は「ビュウ・ビュウ」と吹き、房州の貝海女は「オーイ・オーイ」、石花菜海女は「ホイッ・ホイッ」とつくという。この口笛をイソナキ（三重県御座村）とか、ハライキ（大分県佐賀関）とよぶところもあり、海女の労働のきびしさを表わしている。

それでも、房州の海女は船倉島の海女と同じように「口笛を吹くと生きかえったように元気がでる」という。息をととのえろということとは、人生の旅路でも必要なことだと実感した房州路であった。

（前千葉県立安房博物館長）

「虚空遍歴」の文学碑を尋ねて



上 山 定 治

長い長い、北陸トンネル（全長二三、八六九米）を教賀から北へ抜けると、旧北国街道筋に、昔、宿場であった鄙びた今庄の街が、日野川を挟んで静かに息づいている。その

今庄は、かの有名な作家、故山本周五郎氏（昭和四十二年没）がものされた小説「虚空遍歴」の主人公、放浪の芸術家、旗本くずれの町人、八千石の旗本の次男坊であった中藤沖

也の終焉の地である。作者山本周五郎氏はこの宿場街の今庄をこよなく愛されて、その宿屋の二階に寄り、小川のせせらぎを耳にしながら、己れが果てるように、中藤沖也の末路を画かれたと云う。私は、昭和五十一年の夏七月そこに建てられている文学碑を尋ねて、中藤沖也の面影を偲ばんものと旅に出たのであった。

私にとって越前は、昭和二十四年、戦後間も無く学制改革が行はれ、旧制の国立専門学校等を一県一大学の原則により、大学に昇格する所謂新制大学創設のことがあって、旧制の高等工業学校と師範学校とを、工学部、学芸学部との二学部とする福井大学創設するの事業に走せ参じたので、その土地と人々とも共に深い縁を持つところとなったのであった。それは、あの雪深いことで知られている越前が、福井大震災の後、更に戦災にも逢い殆ど壊滅にも近い土地となったところに、大学を創設するの業が、男子の本懐とも云うべき程のものと考えたからにも由るのであった。

初代の学長は、この地、越前の御出生の東京大学名誉教授で、当時松本医科大学長であられた、竹内松次郎先生で、迎えられて、その秋、御赴任の道中の中央線の車中で、木曾谷を通りすがり乍ら、やおら腰の矢立を取り出されて巻紙に認められた、帰郷感を、お伴の私に賜ったのであるが、それは

離郷在外四十五年。帰郷先想春嶽候奨学之恩。福井大学

学長任比横井小楠来越之任。静学郷土人心帰趣 除講本学発展方途。

であった。私は衷心感にたえなかつた。先生は、十松と号され、こよなく緑の色濃い松の木を愛され、今も尚残る練馬の御屋敷には赤松の樹立が亭々に聳えている。そして陶淵明に傾注され、その詩を愛され、終生の座右とされていられた。しかし御専攻は基礎医学であった。

そして昭和二十八年にお茶の水女子大学に転じられたのであったが、その時の学長が野口明先生であって、後日、この弘道会の会長でもあられたことを知った。先生は詠歌をよくされ、今も尚心に残っているのは、

十六夜の月澄みにけり泰時と云う人ありて我恋いやまず

であって、今は鎌倉の地に安らかに眠られつつ、泰時の時勢に思いを致されていられることと思っている次第である。更に旧制第二高等学校校長であられた故をもって詠ぜられた

大いなる涅槃の如く二高逝く友よ尚志の契守らむ

を最近その記念碑銘とされたことは門外の私も、志で難く心に残っている。

さて、私が、山本周五郎氏の「虚空遍歴」を、忘れ難い

ものにされたのは、その主人公、中藤沖也の終焉の地が越前は今庄であって、越前とは前記のような縁のあることに由るものでもあるが、更にこのことを知るに到ったのは、紀野一義著の、N・H・Kブックスの「禅」と「遍歴放浪の世界」なる二書の中の記述に由るものである。

旅は、日本人の心のふるさとである、と述べられ、歌人若山牧水の

幾山河越えさり行かば寂しさの

はてなむ国ぞ今日も旅ゆく

を掲げられて、日本人は旅に心をひかれると述べられてもおられる。小説「虚空遍歴」の主人公、中藤沖也が、江戸浄瑠璃を完成しようと、生涯をかけ、ついに失敗して北陸路の山中の宿場街、今庄の宿で、望を果さんとしての加賀、金沢へ行く中途、雪深い中に果てたことに、私も限り無く心を引かされるのである。

「人生は虚空を遍歴するに似たり」とする、この言句に心をとらはれて、その記念の文学碑に接せんものと、曾逝のこの地の碑前にたたずんでしばし瞑目、低回去るに忍びなかった。将に「虚空遍歴」の心を心とすることができたものと思う。それで沖也の考えたことを左に記してこの稿は不備乍ら終りとする。

—それでもなお生きてゆく

なんのために、どんな目的があって、あんなみじめなことをしながら生きてゆくのか。おそらく、あの人たちにはなんの目的もないであろう。いざり車に乗って残飯をねだるのも「他人の家のごみ箱をあさるのも、その当人がしているのではなく、生きていっているのちに支配されているだけではないか。生命という無形のもの人間を支配して、あのようなみじめなことをしても死に至るまでは生きようとさせるのではないだらうか、と沖也は思った。

「そこにはもうかれら自身はないのだ」と沖也は独りで呟やいた、「——いざり車で残飯をねだっているのはいのちだけで、老人そのものはそこにはいない、人間としての老人はもうその肉身から去って、虚空のどこかをさまよっているんだ」

そのとき沖也は、自分の中でなにか変化が起ったように思えた。自分の中からなんかがぬけたような、またはなにかが自分の中へはいって来たような、はっきりとは云いあらわしがたいが心の中に新しい変化の起ったことは現実を感じられた。(新潮社文庫版下巻三八頁)

(働樞の芽会評議員)

秋の煙に似たり



堀 賢 次

遠くへ行こう——。

国鉄の駅のポスターは呼びかける。

遠くへ行きたいのは、都会人のねがいである。都会で働くサラリーマン、オフィスガールには、特にその傾向がよい。

デスクの向うのビルの窓——。あの窓の向うに空がある。自由な空気がある。自然があり、風土があり、人情がある。だからサラリーマンの息ぬきは「出張」の旅であるといわれる。しかし、NHKの放送現場で育った私には、息ぬきの旅はなかつたように思う。

息ぬきの旅はなかつたが、私にはその数十倍も新鮮で強烈な、人と歴史を勉強する千載一遇の取材旅行があった。とくにその中の一つ——、終戦時の南京（中国）政府代理首席、陳公博氏の日本亡命事件の取材旅行は、三十年近くを経過した今もなお、昨日のことにように鮮明に生きている。

からす列車に乗る

昭和三十三年——。私は内幸町にあったNHK芸能局のラジオ文芸部職員であった。当時、テレビはまだ現在ほどの普及は見せず（一九八万、11%）、ラジオの全盛時代である。（一四〇〇万、81%）その頃、私にはプロデューサーとして、入局以来あたたためてきた企画があった。それは終戦時における南京政府主席代理、陳公博氏の山陰地方亡命事件である。

今でこそ、この事件は全貌を公開されているが（読売新聞社、昭・四二年刊「昭和史の天皇他」、当時はその片鱗すら報道されていなかったのである）。

——陳氏は広東の人。汪精衛氏と共に、日本軍の占領下にある中国民衆を守る為、進んで南京政府樹立に参画したが、敗戦直後の八月二十五日、飛行機で米子市の三柳（みやなぎ）飛行場に飛来、山陰、京都方面に亡命した。

しかし、同年十月二十五日、中国機で再び南京に召喚され、二十一年十月、蘇州で銃殺刑に処せられた。悲劇の人である。

断っておくが以上は取材の途中に分ったことで、当初は

「亡命」の情報しか得ていなかった。それも終戦直後、京都の戦友から「噂だがネ、中国の要人が山陰から京都へ亡命中だそうだ。複数らしいよ」。これが数年間、私の脳裏に灼きついていた。その後、NHKに入ってから、松江放送局に電話すると、「事実らしい。関係者が米子市役所にいる」という。私は勇み立った。私のような九州人は、中国と聞くだけで血の昂りを覚える性僻がある。頭の中で、事件を組み立ててみる。八月十五日の敗戦、南京の国民政府要人は、合作した日本と、重慶政府との間に立って、悲劇的な窮境に立った筈である。進んで重慶軍の進駐を迎えるか、日本に亡命するか死を選ぶか、——。そのいづれかであろう。

私の担務は、ラジオの「名作劇場」(六〇分)「放送劇」(五〇分)の演出アシスタントであったが、この「事件」だけは、私がドラマに書き、私が演出しなければならぬと思った。

私達の郷里九州の町には、孫文の辛亥革命(明治四四年)に馳せ参じた男達がいた。隣国の革命に、身を殺し、進んで仁を成したのである。これは語り継がれて、私達の血の中に生きている。また、郷里では、春、西の大空に黄砂の大屏風が聳立する。ゴビ砂漠の黄砂が、華北の平原から渤海を越え、東シナ海をわたって九州に吹きよせるのである。大空の黄砂の屏風を仰ぐたびに、私達は中国を思い、赤い

夕陽に染まる大陸に強い憧憬をもった。

戦時中、日中合作の下に樹立された南京政府主席汪精衛氏は、孫文の愛弟子であり、陳氏は汪主席の後継者である。かつて「同生共死」を標榜した友邦のため、一曲の鎮魂譜を手向けるのは、日本人の義務ではあるまいか。

しかし若者のこの提案は、二年経っても実現しなかった。三年目の昭和三十三年秋、ようやく提案が通過した。ドラマとして放送するかどうかは分らないが、一応取材して見よという許可が出たのである。

私は録音機を肩に、東京駅から大社(島根県)行午後十時四十五分発の寝台車にとび乗った。横になったが、眠れない。カーテンのすき間から外をのぞくと、暗い無限の闇がひろがっている。もう食堂車はない。竹の皮包みを開いて、握り飯を取りだした。頬張りながら、明日の取材を考えた。山陰に行くのはいいが、関係者は全部揃っているのか。不安がよぎる。ナニ、米子市役所へ行けば、「事件」の輪郭ははっきりする。当って砕けろだ。攻撃だ——。その中、いつか眠った。カーテンのすき間から朝の光が射してくる。飛び起きて洗面所に行く。鏡を見るとまっ黒な顔である。この鈍行列車は、当時「からす列車」と呼ばれていた。まだ「戦後」が、色濃く残っていたのである。

主役のないドラマ

さわやかな朝、米子の街には秋風が吹いていた。赤煉瓦の、米子市役所の玄関を入った。応接室に通された。ソファの白い掛布が眼にしみる。

総務課長の東中勲さんが入ってきた。五十年配の温厚そうな方である。挨拶がすむと東中さんは感慨をこめていう。「この応接室です、エ、一陳公博さんのご一行が最初に来られたの、ソノ、あんたの坐つとられるソファに陳先生がおかけになったです。」

——一行は終戦の年の八月二十五日、午後二時頃、木炭車で突然、角盤町の市役所を訪れた。暑い日であった。東中さんは、木炭車が玄関に停つたのを、二階の兵事課の部屋から目撃していた。間もなく、斉藤市長から電話があり、「只今、南京政府主席の陳公博閣下一行が来訪された。すぐ応接室に来るように」という。斉藤市長は軍医中將で、元關東軍の軍医部長、後の米子医大の創設者である。

「私がこの部屋に入りますとナ、主席はそこで、市長と向い合つて話しておられました。随行の周隆彦さんが通訳してられましたよ。」

一行は、主席を入れて七人である。夫人、秘書の莫国康女史、林伯生、陳君慧、何炳賢、周隆彦、それに一行を南京から先導してきた南京政府軍事顧問部の小川哲雄大尉。

これにしても、一行は南京から米子まで、どんな経路で、

どんな目的でやってきたのか。

「それが小さなMC機なんじゃそうですナ。それに七人が乗つて、三柳飛行場に胴体着陸をしたんだそうですわ」一行に遅い昼食が供された。白米の握り飯に沢庵。終戦時の日本では最上のご馳走である。が、誰も手を出さなかつたという。

市長と東中さんと、先導の小川大尉と三人、額を集めて協議した結果、一先ず一行を市内の水交社に案内することにした。東中さんの記憶によれば、一行を送つた車は、赤い消防車であった。

「やあ、おそくなりましたでエ」
と松田善治さんが入ってきた。七十歳位の実直そうな方である。松田さんはいう。

「何しろ、米子の大通りを背広と中国服の婦人が、真赤な消防車に乗つて通りすぎてんですけエー、たいがいの人は驚きますわナ」

その夜半、水交社は数十人の在郷軍人の襲撃を受けた。中国軍が進駐して、水交社を占領したというデマが街中に飛んだのである。中には竹槍を突き出した者もいたという。松田さんは表にとび出し、「満州国のエライ人達じゃけ」といって、物騒な連中をなだめ、軍服姿の小川大尉が、連中を追い返したという。

「やあ、織田です」

とラジオ山陰社長の織田収さんが入って来られた。長身白髪のお紳士である。中国上海の東亜同文書院出身で、元毎日新聞記者。斉藤市長と同じ中国生活の長い人である。

「私はあの日、斉藤市長から、ご一行の相談を受けた時、それは米子市でおかまいまするのが至当でしょうと答えました。昨日まで一緒に戦ってきた戦友が、戦い破れて米子に亡命して来られたのじゃありませんか。県や国はどう出るか分らないが米子市だけは総力を挙げて一行をお助けしましょう——。そう申し上げたのです。」

その県や国からは、仲々応答が来ない。このままでは人目につきやすいので、一行を鳥取と米子の中間にある温泉地に移すことになる。小川大尉は、兵事課長の倉敷恒徳さんと交渉に先発した。

ところで、私が気になるのは「小川大尉」の所在である。この人が見つからなければ、この企画はドラマ化できないのである。

「小川さんは、どこにおられますか？」

東中さんと織田さんは首を振った。

東中さんは、東京ではないかという。織田さんは九州の人だという。私は焦ってきた。何か手がかりはないかと、質問を重ねると、織田さんがポツンと云われる。

「浅津の望湖楼へいらっしやい！」

湖の中の旅館

水面を風がわたる。

浅津温泉の望湖楼は、東郷湖に臨んだ温泉旅館である。南が湖、北は日本海に接し、米子からは陸続きなのでバスで行ける。

経営者の中島二郎さんご夫妻に会った。ご主人は四十二、三歳、小肥りで、太い声のもち主であった。

「ウン、あれは八月二十六日の夕方でした」

中島さんは、目のパッチリした色白の夫人の顔を見ながら語る。

——なごい鯛の鳴きしきる玄関から、軍服姿の小川大尉がぬつと上ってきた。敗戦直後というのに、腰には軍刀を吊っている。用件を聞くと、中国から来た一行七、八人の宿を頼みたいという。中島さんは云った。そりやお引き受けできないことはないが、うちには関西の疎開学童を八十人も世話している。とても手が足りない。それよりも、その方のお名前を聞かせて貰いたい。名前も云わずに世話をせいというのはチト、おかしいがネ。すると小川大尉は、横を向いて、小声でチンコーハク：チンコウハク：と二度呟いたという。

そこで中島さんは胸を叩いた。ようござんす、ひきうけましよう。かあちゃん、いいネ。男の一諾である。

翌日、一行は望湖楼へトラックで訪れた。一行の服装は、男子は軍服、女子はモンペ姿——。当時は日本人全体が、国民服にゲートルの時代である。企図の秘匿には、この方法しかない。「アリア、アリア！」と、中島さんは驚いたという。

中島さんが聞いていたのは「大臣一行」であったから——。「うちには一週間程おられました、一番苦勞したのは、一行のお食事と、近所の人達に怪しまれないようにすることでした。」

夫人の藤江さんが云う。

湖に面した見晴しのよい二階の部屋を主席に、次の部屋を夫人に、他の人達は階下の部屋に入った。主席は独り黙々と短波ラジオを聞き、米子の織田さんから借りた中国書籍に読みふけていたという。

そこで、小川氏の動靜をきいた。

「知りません！」

中島さんは、ケロリとした表情である。

「とうちゃん、小川さんは九州の方ですよ」

夫人がそばからいうと、中島さんの眼が輝いてきた。

「ウン、思い出した。浅津じゃ」

九州に浅津という地名はない。これは困った。一瞬、夫人が中島さんの膝をピシヤリと叩いた。

「浅津は、ウチじゃないですか？」

そうである。ここは鳥取県東伯郡羽合町浅津である。

「イヤ、浅津じゃない、中津じゃ！」

大分県中津市。胸がジーンとした。同郷の人である。わかりました。探します——。私は録音機をかついで望湖楼を出た。

金閣寺

東京に帰った。小川大尉を擱まなければ、この企画は破算である。中津市役所に問い合わせたが分らない。中津市の知人に電話したが、誰も知らない。地元の新聞社にも聞いた。中学校の同窓会にも聞いたが返事が来ない。NHKの通信部に頼んだところ、如水区でその人らしい噂があるという。悶々と待つ中に、一通の葉書が舞いこんだ。

「哲雄は、現在新橋の貿易会社「連友」に勤めています——」

小川大尉の母堂からの葉書である。

分った。事もあろうに、内幸町のNHKの膝元、百米のビルにその人はおられた。

「僕を尋ねて米子まで、それは大変でしたね」

小川哲雄さんは快瀧に笑った。眼鏡の中の眼がやさしい。武道で鍛えあげた体格は、ひきしまっている。

一行は浅津の望湖楼を六日間で引き上げ、小川大尉の案内で京都の金閣寺に滞在した。小川大尉が、先発して金閣

寺を訪れた時、管長の村上滋海師は下ブさらいをやっていた。事情を説明すると、みなまで云わせず、あー、いいですよ、おあずかりしましょうと淡々とした一諾をくれたという。

既に京都には進駐軍が入っていた。一行の亡命は、絶対に秘匿しなければならぬ。ある日、四、五人のG Iが金閣寺の本堂に入ってきた。京都府警から、特に一行のために派遣されていた広瀬秀夫氏は、一刀を背中にかくし、じつとG Iの動きを屏風の陰から注視していた。しかし、これはお庭拝見の米兵で、間もなくガヤガヤ話しながら帰っていった。が、油断はできない。

老松の梢を吹く風。鯛の声、池の水面の静かな小波——。一行にはしばしの平安が続いたが、ある日のこと突発事件が起った。主席がピストルをとり上げたのを、夫人が発見し、とびついて大声をあげたのである。自決は未遂に終わった。そして九月二十九日、一行は中国からの召喚電報を受け、帰国を決意する。

小川大尉は、一行に潜行を勧めた。どこまでも、一行を守り通そうとしたのであるが、主席は、小川の手を握りしめ、好意を謝した。

十月一日、一行は京都を発って思い出の米子へ向った。すでに青天白日旗のマークをつけたC—47機が一行を待っている。轟々とエンヂンがうなり、七人を乗せた中国機は

三保飛行場を離陸した。

私はこの亡命事件をドラマにし、その中に関係者のナマの声を挿入して臨場感を盛り上げた。米子の人々、浅津の人々、京都の人々、そして主人公小川大尉の声を入れて五十分の放送劇に構成した。タイトルは「私は囚人ではない」。昨春、小川さんはこの亡命事件を「日中終戦史話」という著書にまとめ出版された。その中に次の一節がある。

「——中国憲兵は、罪人として主席に手銃をかけようとした。瞬間、主席はそれを右手で払いのけ『我不是犯』（私は囚人ではない）と叫んだ。これがたとえドラマとしても、恐らく真実に近いものではなかったか。主席の心中は、まさに「私は囚人ではない」であつたらうことは確かである。」

× × ×
数年前、私は中国人のT氏と、金閣寺に村上滋海師を訪問し、陳主席の絶筆となつた次の詩句を拝見した。

濃如春雲 淡似秋煙

(濃キコト春ノ雲ノ如ク、淡キコト秋ノ煙ニ似タリ)

(済生会広報室長)

心の旅路



鈴木寛一

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。船の上には生涯をうかべ、馬の口とらへて老いをむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず。」(注一)

この一節に回り合ったのは、いづれの年であつたらうか。しばしば口づさむようになってから久しいものがあるように思われる。もとより鉄道沿線に生を享け、汽車——今や遺物と化したSL——の往来を眺めつつ、未だ見ぬ異国の空に想いを馳せつつ育った身には、この一節に回り合う遙か以前より、漂泊の想いの止むところがなかったように思われる。長ずるに及び、学生時代の余暇の大半を——当時の不自由な交通事情にもかかわらず——旅の空の下で過したことが、今は懐しく思い出されもすることである。さらに、社会に出てからは、主として仕事の関係で、国内の各地は勿論のこと海外の随所に旅し、一部特定の地域を除いては世界を遍く回り歩いたように思われるのである。そのためか、昨今では旅についてはややマンネリズムに墮する

感なきにしもあらず、次回は宇宙旅行でもと想像を逞しくしている有様である。そのような中で、これまでの旅の思い出のうちの有一駒が、忘れぬままに記憶の中に鮮かに蘇って来るのである。

それは、指折り数えてみるに十数年前に遡ることとなるうか。わが国の経済も漸く高度成長が安定した軌道に乗り、日毎に生活の豊さが増すとともに、外国との交流も次第に頻繁になろうとしている頃と覚えている。そのようなある日、フィリピンで開催される国際会議に出席することとなった。当時交流の乏しかったアジア諸国についての情報が必要とみられるところから、国際会議出席に先立って、それら諸国を歴訪することとした。台湾を皮切りに、タイ、インドおよびインドネシアの諸国を訪問したところ、漸く豊かな日常に慣れた身には、初めて目にするこれら諸国の貧困が大きな衝激となったことが、最も印象深いことのひとつであった。

ところで、目的地のフィリピンは、第二次世界大戦中には最大の戦禍を蒙った国のひとつであるところから、国交

も正常とは云えず、わが国に対する国民感情も敵しいものがある。確かに、国際会議開催地の空港では、現地の人から流暢な日本語で挨拶されるとともに、軍票の購入を求められもした。また、漸く忘れかけていた戦時中の歌曲を、正確な日本語の歌詞とともに披露されたこともあった。そこで名状しがたい異和感とともに、対日感情への疑念を一層深めることとなったように記憶している。

ミンダナオ島北端のカガヤンデオロ市で開催された国際会議は、開催国側の官民挙げての慎重な配慮と民族性としての手厚いホスピタリティーに支えられて、予定通りの進歩をみるとともに日を追って会議場の雰囲気にも慣れることができるようになった。依頼された講演が、当時わが国においても緒に付いたばかりのコンピュータ利用によるOA（オフィスオートメーション）の紹介に及ぶや聴衆の間に驚歎のどよめきが湧き出たように記憶している。この講演の内容とともに、質疑応答を含めての予定時間の厳守が注目を集めて、これこそ日本経済の高度成長の秘訣に外ならないとのコメントも聞かれたように覚えてゐる。このように一見無事とみられた「場」が、しかし、永年にわたって忘れぬ旅の一駒としての「現場」に変化しようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。(註三)

それは、数日にわたる国際会議もやがて終末に近ずいた、

とある一日のことであつた。長かった昼間の会議を了えて、夕方に予定されたパーティーに出席すべく、会場の前に用意されたバスの一台に乗込んだ。すると隣合つたフィリピン人が落着いた声で語り掛けて来た。

「私はフィリピンの牧師です。私の兄弟姉妹は日本軍に殺されました。」

その一瞬、それ迄緩かに流れていたかみえた時はみるみる凍結し始めていた。バスも他の乗客もろ共吹き飛んで、かの牧師とその視線に射竦められて身動きひとつもままならない自己の影しか見当らなくなつてしまつていた。

第二次世界大戦中は、戦場にこそ臨まなかつたものの、敵機の襲来や敵艦による艦砲射撃に怯えつつも兵器の生産に従事し、かつ短期間ながら軍隊生活も体験して、戦争の一側面を垣間見た積りになつていた。しかし、野戦の体験を持たぬのみならず、家族は無論のこと親戚縁者に至るまで、その身体・生命および財産に著しい戦禍を蒙ることのなかつた身には、所詮戦争は観念的なものに止つていたようである。あの一瞬の後のパーティーは勿論のこと、どのようにして羽田——成田開港以前のこと——に降り立ったのか、杳として記憶がない。

それ以来、例の衝激は日時の経過とともに除々に鎮静化に向つたものの、海外ことにアジア諸国、別してフィリピンに旅立つごとに記憶を新にするものがあつた。顧みるに、

これまでの旅は、主として業務上という制約によって心を通わせうる余裕のあるものとはなり得なかつたようである。従つて、例の凍結した一瞬を解除して、隣席の牧師とともに何の蟻もなく旅を再開し得る境地に迄到達できていないのである。今や、その境地を希求しつつ、これ迄の短かくはなかつた「身体からだの旅路」に勝るとも劣らぬ「心の旅路」

九州の旅

— 西郷南州を偲びつゝ —

私は昨年の春思い立ち、西郷南州ゆかり所縁の地九州の旅に出ました。羽田空港より午前八時頃出発、約二時間にて熊本空港着、直ちに観光バスに乗車して阿蘇の山（カルデラ活火山、今から十数万年前、数回に及ぶ大噴火を起し、半経一〇〇軒にも渡つて膨大なる溶岩を噴出し、現在五岳の複式火山となっている）に登る。

実は、九州は三回目の訪問であり、第一回は太平洋戦争勃発直前にNHK調査部勤務時代、「国民生活時間調査」の為に熊本中央放送局に事務打合せの為に出張した折のことであつた。当時はトンネルとしては無く、連絡船にて下関・門司間を重い旅行カバンを携えて九州本線へと乗り替え、列車より船へ、船より列車への先を争つてのマラソン競争

を迎へることとした。次の句を口づさみながら……

「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」(注三)

(注一) 小杉 放庵「奥の細道画冊」電星閣・二頁。

(注二) 小田 実「われわれの哲学」岩波書店。

(注三) 山本さとし「旅の楽しさ」講談社・二〇六頁。

(東京都 会員)



岩 崎 晶

は実に難儀でした。

熊本では、加藤清正の造営にかかる熊本城の石垣が洵に「重厚なる曲線を描き、その質実剛健なる美しい姿は天下の名城として、七年の歳月をかけた一大傑作であります。天守閣に登りて附近を睥睨し、快哉を叫んだ。虎退治の清正公、地震加藤を回顧かへみしました。つづいて、寛永九年(1632)肥後藩主細川忠利が「成趣園」と名付けた名園「水前寺公園」は、東海道五十三次を模し、水前寺富士と称せられる円錐形の小山が爽やかであり、園内をそぞろ歩きして、涼を覚えた次第でした。

熊本局にて打合せ終りて翌日、熊本よりは汽車にて牛馬の放牧されている阿蘇の大高原を車窓より打眺め乍ら九

州を横断、湯の里別府に泊りました。血の池、竜巻地獄等の物凄しい温泉地獄巡りは、頗る興深く印象に残っております。竹細工実演店にて竹籠を土産といたしました。

帰途は、波静かなる瀬戸内海を汽船にて、島々の浮ぶ景勝の間を縫うが如くして大阪迄の船旅でした。

第二回目は、終戦後、NHK放送文化研究所勤務の際に、恰も「日本全国図書館会議」が開催されて出張した時でしたが、既に関門海峡には「トンネル」が開通していた本州と九州とは寝ている間の通過でした。

鎖国時代唯一の外交の窓口であった長崎は、グラブアー邸が港を見渡せる丘の上にあり、庭園には紅白の花咲き乱れて、その木造洋館は明るさに充満し、エキゾチックな香り豊かであった。大浦天主堂は、フランス人宣教師プチジャンが元治元年(1860)に建てた日本最古の天主堂で国宝、その堂内のステンドグラスは朝陽に映えて美しい。その時丁度、私は曾遊の地、巴里のノートルダム寺院のステンドグラスを思い浮かべました。

ゆるいカーブの続く石畳の坂道を辿ったのも亦楽しい。

平和記念公園には島原出身の彫刻界の最長老たる北村西望氏作の平和祈念像(高さ十米、重さ三十噸)が見事に公園を圧していた。夥しい鳩の群が飛び交うのも、平和の御代ならではである。港の夜景も亦よく、嘗って見た香港の夜景の華麗さには及ばぬが、一幅のパノラマであった。

昨年の旅が第三回目であり、南九州は初めてであります。此の度は空の旅にて連絡船にも乗らず、トンネルも通過せず、空を一飛びにてその日進月歩には驚くばかりです。

熊本空港よりは、阿蘇の高原をバスで周遊し、中岳の噴煙を真近く見て、草千里を經由、そのスカイラインは実に雄大、土地の人は釈迦寝像と称し神聖視していた。延岡・宮崎を経て青島に宿した。途中の高千穂峡は断崖絶壁、緑色の深淵、数条の滝、実に幻想的な秘境である。青島の鬼の洗濯岩の奇観、不死鳥が羽根を広げた様なフェニックスの並木、サボ天園のサボ天群、夫々に南国の風景。

鵜戸神宮は神武天皇の父、ウガヤフキアエズのコトをまつり、鵜戸岬の突端の大洞窟の中に、朱塗りの小さな社殿が神々しい。太平洋の荒波が岬の岩、崖に打寄せては返し、白波を上げて甚だ壯観。安産に靈験あらたかとか、新婚の旅のメッカとなっておる。

叔「南洲のこと」「敬天愛人」をモットーとする南洲は、幼名を小吉、後に吉之介、また吉兵衛、吉之助と称した。長じて隆永、隆盛といい、南洲と号し、時に大島三右衛門、菊池源吾と称したこともある。実直・寡黙、信頼の置ける人物として多くの人々に愛され、洞察力も多分に備え、至誠の人、茫洋として抱擁力ある正に薩摩の産んだ偉人である。薩摩藩の西郷吉兵衛の長男として生まれ、十八歳の時那方書役に任命されたが、生涯に三度も島流しの刑に処せ

らている。

第一回目は、お留山の狩猟の件と山火事事件で、遠島の刑となり、奄美大島へ。島の子供等相手に読み書きや、相撲の相手になって人気があった。藩の跡継問題で、島津斉興が長男の斉彬を藩主にした為、その祝の意味で許されて帰藩することとなる。

第二回目は、京都清水寺の僧、月照との関係で流罪となつた。月照は倒幕尊王の志篤く攘夷派の人々と共に、幕府に反抗する人物として要注意とされていたのである。橋本左内・吉田松陰・梁川星巖、梅田雲浜、頼三樹三郎など八十名以上が安政六年十月捕えられ、主な者は死罪となつた。世に云う「安政の大獄である」。月照の身辺も亦危くなり、吉之助は月照を伴って京都を脱し、九州へと。その時、幕吏の追捕の手も激しく、薩摩藩も処置に窮して国境日向で斬捨との結論に達する。吉之助は最早これ迄と、月夜薩摩瀧に舟を浮べ、月照と手を取合つて投身入水二人を同舟の平野国臣等が船中に引上げたが、吉之助のみ息を吹き返した。その後も幕吏の追及ますます激しく、藩命にて名も菊池源吾と改め、又々大島へと流される。

流罪中に、大老井伊直弼が攘夷派の水戸・薩摩両藩の浪士連に江戸桜田門外で暗殺されたことを知る。文久元年(1861)十二月鹿児島より船が来て帰国。これは、大久保一藏、有村俊斎、伊知地正治など吉之助の親友達の嘆願に

より藩主の許が出たのである。

第三回目は、藩主久光との衝突によってである。切腹は免れたが、怒に触れて吉之助は沖之永良部島へと遠島を命ぜられることとなる。沖之永良部島の座敷牢の中に幽閉されていた時、文久二年八月、久光の行列が相州生麦村にさしかかった際、馬上の四人の外人に無礼ありとし薩摩藩士が斬りつけた生麦事件の報が、大久保一藏の手紙によって齎らされた。文久三年生麦事件のことで、怒つたイギリス側の軍艦が鹿児島湾まで攻めて来た。

薩藩はこれと交戦して退けた。やがて久光の赦免状を持った丸に十の字の蒸汽船が、来りて、帰藩が叶う。丁度京都にては寺田屋の騒動が起り、風雲急。長州藩では倒幕派の桂小五郎(木戸孝允)や久坂玄瑞が活躍「蛤御門の変」に於ては長州と薩摩が戦うこととなる。吉之助の接渉により長州藩も矛を収め、坂本竜馬、中岡慎太郎等と相計り薩・長・土の三藩が同盟して倒幕に邁進。岩倉具視が運動して討幕の密勅が、薩摩・長州の両藩に下つた。

徳川慶喜は慶応四年(1868)正月、鳥羽・伏見から京都へ向つて一万五千の兵を進める。京都にいる薩長の兵は四千五百。吉之助は薩長軍の参謀。兩軍一進一退であったが、徳川軍は錦旗を翻す長州軍に逆らえずして退却、慶喜は兵庫港より開陽丸に乗り江戸に戻つてしまつた。朝議は二つに分かれたが慶喜追討と決定。征討大総督として有栖川宮

熾仁親王、吉之助は參謀総長。諸藩の兵を合わせて五万の大軍。慶応四年二月、つぎつぎと京都を立て、東海道、東山道、北陸道の三方面より進撃。

その時の進軍歌は有名である。

トコトヤレ トンヤレナ

宮さん 宮さん お馬の前に

ひらひらするのは なんじゃいな

進軍した官軍の先頭は品川に達し、吉之助は勝安房守と芝の薩摩藩邸で会見、両雄対峙の腹芸にて江戸八百八町は地獄の戦火を免れる。但し、旗本等は彰義隊として上野で官軍と更に戦い、吉之助は長州藩の大村益次郎らと力を合せ会津まで攻める。会津の飯盛山の「白虎隊」は歴史にその名を止め、私は四・五年前に「飯盛山」に登って切腹自刃した若年の士達の墓に詣で、合掌、その冥福を祈った。

慶喜は水戸藩にお預けとなり、徳川の家名は残されることとなった。明治元年吉之助は鹿兒島へ戻り、山雲野鶴を友としていたが、岩倉具視が鹿兒島まで来り、新政府に於て働かねばと説得し、名も隆盛と改めて、陸軍大将・参議となり「薩藩置県」の回天の大業を大久保利通等と成し遂げる。後、岩倉や大久保と政策上の意見の相違から下野し、郷土の青少年の訓育教導に尽し、私学校を設立する。暫くして、私学校の生徒に擁立されて「西南戦争」を起す。半年に亘る大激戦の後、敗れて城山にて自刃、時に、五十一

歳であった。私は第三回目の旅で熔岩の道を辿って、桜島に足跡を印し、火の国、薩摩の生んだ徳望厚き英雄南洲を偲ぶ。鹿兒島市内にある彼の銅像は郷土の誇る大人物としての威か、ついで風貌であるが、上野の銅像は、犬を伴いて浴衣姿で親しみが持てる傑作であります。

島津久光が別邸として建てた「磯庭園」は、別名「仙巖園」と謂い、眼前に錦江湾、遙かに桜島の噴煙を正面に見て素晴らしい眺めである。つづいて南洲の「生家」をバスの窓より瞥見する。貧しい藁葺屋根の小住宅である。南洲は朝な夕なに桜島を子供の頃より眺めて「人生何事か成らざんや」と青春の血をたぎらせたことでもありません。

北上して霧島温泉着、翌朝は軽井沢を彷彿させるえびの高原の冷気を吸い乍ら下山、三角よりフェリーにて島原半島へと渡り、島原の乱の天草四郎の昔を追憶し乍ら、折しも潮干狩りに賑わう有明湾を右手に見て長崎着。長崎にては「原爆資料館」、「べつ甲会館」等を見学し、夕食後は長崎港の夜景を懐かしく佳賞する。中華街での「チャンポン」は仲々の美味である。翌日は西海橋より有田へ。窯元を参観し、壺と皿とを家苞とする。

小雨煙る福岡空港より飛び立って羽田着。モノレールにて浜松町迄。色々と得る処多き見聞を広め楽しかった旅を終りました。現在の日本は、多数南洲の如き私心なき人物を必要としておることと思惟いたします。(特別会員)

世の中にはこういうこともあるのかと思わせたのは、先日報道された「自力で無罪をつかんだ」事件。主人公は東京の会社員長嶋二良さん（五二）である。

去る五十七年三月、長嶋さんは警察に逮捕された。静岡県下田市の酒店で缶ビール五十ダース（約二十二万円）のサギ事件があり、当時市内の海水浴場売店で働いていた長嶋さんが疑われたわけだ。取調べ公判中を通じてアリバイを主張し、否認したが、酒店の主人の「この男に間違いない」の証言もあつて懲役十カ月の判決を受け、やむなく服役した。

服役中から長嶋さんは「この犯行は同僚のAがやったにちがいない」と考えた。同じ売店に働き体形がよく似ている。長嶋さんは出所後、独力でAをたずね回った。ギャンブル好きのAは必ず競輪、競馬、競艇場に現われると見て立川、千葉、川

崎、大宮、浦和、川口、戸田などを棒にして週に何か所も回った。

この間長嶋さんにはつらい日々だった。元の勤めはクビになり、妻とも離婚。友人の紹介で不動産会社に就職し、仕事の合間を見ての犯人探したが、十カ月後、ついに一念実っ



証言 間違つた



入江 徳郎

て大井競馬場でAを見つけた。

Aは振りほどいて逃げようとしたが、長嶋さんはその手を離さず、大井警察署へ引張って行った。このAはその折り岐阜市で六百万円相当のサギ事件で指名手配されており、早速調べられ、下田の缶ビール事件も

自分の犯行だったと自供した。

こうして再審開始となり、静岡地裁沼津支部で長嶋さんは「無罪」を言い渡され青天白日の身となった。

「ようやく肩の荷が降りました」と語っているが、無責任な証言で犯人にされてしまうとは、おそろしいことだ。

松本清張の小説「証言」は、自分の生活を守ることしかない知人の偽証で殺人犯にされるサラリーマンの話だが、長嶋さんもあぶなく一生汚名を負うところだった。

司法制度の整っている今日、こんなことがと驚いた人も多かるう。検察も裁判所も、証言の吟味はしっかりと行つてほしい。

脳卒中のあと片麻痺や言語障害を
生じますと、そのため社会生活に支
障を来たします。障害の程度はピン
からキリまでありますが、どんな障
害に対しても幸せな人生を送るこ
ができる様に援助するのがリハビリ
テーション（以下リハと略）の基本精
神です。

(一) リハ訓練の手段

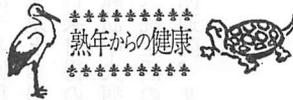
リハ訓練の種類は主に下肢機能を
援助する理学療法（PT）、上肢機
能の訓練をする作業療法（OT）、
その他言語療法（ST）、心理療法、
義肢装具などがあり、どの機能訓練
が必要かを診断、処方するのが医師
の役目です。

(二) リハの開始時期

昔は脳卒中後は絶対安静を守らせ
たものですが、なるべく早くリハ訓
練を開始することが大切です。長い
間ねていると手足の拘縮（固くなる）、
筋肉の萎縮、褥瘡などを生ずる結果
となります。

(三) リハの内容

発病初期は意識障害などの為、安
静が必要ですが、臥床の姿勢に注意
し、各関節を動かしてやります。約
一週間後、意識障害の回復をまって
徐々に訓練に入ります。順序は先づ
食事の時を中心に、ベッド上で坐位
をとらせ少しづつその時間を長くし



リハビリテーション



杉浦昌也

て三〇分から一時間位へと延ばし、
やがて腰掛けから立位、歩行へと訓
練を進めます。

(四) 片麻痺の左右差

右麻痺と左麻痺ではどちらの影響が
大きいでしょうか？ 我々の多くは
右利きですから右麻痺では社会生活

に影響があります。失語症を伴うこ
とも多く、また右手で書字が困難と
なります。左麻痺では右手は健常で
すからこの点は良いのですが、空間
失認（左側の物を認めない）などの難
しい障害を伴うことがあり注意を要
します。

(五) 上肢と下肢の差

上肢は巧緻な動作をしますが、駄
目なら書字を含め健側の手の訓練を
する方法があります。所が歩行には
両方の脚が必要ですから、麻痺した
脚の回復が必要です。一般に下肢の
方が良く回復しますが、六カ月位訓
練するとほぼ達しうるレベルと考え
られます。

その他、意欲、社交性、知能低下
等が複雑にからんでリハの成果に影
響するのです。杖つき、ゆっくり歩
き乍らでも、眼の輝きがでて来るの
を見るのは我々の大きな喜びです。

ささやかな実践

清塚十三郎

(一) プロローグ

(リハビリ)

昭和六〇年九一六号掲載の『蓼科山中雜記』の原稿を書き終えて、私は五、六、七、八の四ヶ月を東京と蓼科の往復生活をしてをるうちに、八月の旧盆後、自業自得の不注意にて、蓼科山麓にて脳卒中中で倒れ茅野の諏訪中央病院に三ヶ月、そして清瀬の東京病院に四ヶ月の入院生活の後、三月末無事退院、滝山団地の自宅より週二回通院、リハビリ訓練の生活に入った。

(二) 第一幕

(五階建団地の階段に手摺りを)

あと六ヶ月で満七〇歳になる左半身不随の不自由の体を、階段の壁にもたれかかせ、僅かに利く右手に杖をしっかりと握り、重心をかけ、私は心の底から声にならぬ声を出して叫ぶ。『階段に手摺りを！』『弱者(老人、妊産婦、幼児、病人)に明るい爽やかな、手摺りを！』

昨年八月、脳卒中にて倒れ、悪戦苦闘の末、この三月二十三日、大雪の日、長男の背中に負はれて、ドクターとリ

ハビリの先生方の、『階段に手摺りをつける事』を条件として、退院して以来、思うことは『階段に手摺りを』ばかり。三丁目のバス停前のベンチに腰かけて眺めていると、松葉杖にてヨッコラショとバスに乗る人、腰の曲がった年寄り、臨月近いお腹の大きい若い奥さん。二歳余りの幼児等々、いかに足腰の不自由に見える人が多い事か、今更ら
の如く驚く。

丁度、左足に装具をつけて、右手の杖にすがり乍ら、リハビリ訓練の最中に、団地新聞編集者の中村さんから声をかけられ、『弱者の心に明るい手摺り』という運動を展開しようという気合いをかけられ、暗い毎日の心がパッとひらけた感じだった。

丁度、六、七年前、商店街裏の駐車場使用が不可能になり、理事さん一同、大へんな苦勞で、梅林つくりと共に、駐車場借用に苦勞をなさりし事を想い起こす。

二、三丁目の分譲団地をつくる時には、建設省、住宅公団も、又我々国民も、こんなに自動車が増えるとは思ってもしなかった時代。それが今や、駐車場つくりで、芝生を削る削らないでの大騒ぎ、世の中の移り変りのはげしさに目をパチクリ。

五階建の団地の階段に『手摺り』をつける事など、建設当時の設計者の頭にも、又国民の頭の中にもなかった。その頃出来た病院にも『手摺り』がなかった時代である。

変れば変わるもの。高齢化時代などということばなどもなかった時代である。

皆で生きてゆくという事は、よりよい社会を身近かに。遅れたものを、よりよく改善してゆく事であろうから、一つ明るい爽やかな社会をつくるためにも、二歳の幼児も握れる『階段に手摺りを』つける運動をもりたてたい。エレベーターは無理でも。

(三) 第二幕 産経新聞よりの天祐神助

『東京西郊のさる団地、有志の主婦が毎月ガリ版のビラ新聞を出している。ミニコミ紙よりさらに小さな新聞だが、それに「五階建て団地の階段に手摺りを！」という老人の声が載っていた。▼あと半年で満七十になるこのお年寄り、昨年、脳卒中で倒れリハビリ中であるという。「左半身不随の体を壁にもたれかかせ、わずかに利く右手のツエに重心を移して、私は「弱者(老人、病人、妊産婦など)に手摺りを」と声にならない声で叫ぶのですとあった。▼「団地族」という新語が生まれたのは昭和三十三年。団地の出現は日本住宅史上、革命的出来事といわれ「住宅現象」というより「社会現象」であるといわれた。しかし団地族はみな血気の若夫婦で、当然ながら階段に手すりなどという発想は、作る側にも住む側にもまるでなかった。▼それから三十年、かつての団地族たちは実年や老年にさしかかり、前記のような悲痛な声もそこにあがっている。そこで

住宅・都市整備公団にきいてみると、集団住宅の階段は建築基準法で幅九十センチ以上とされているそうだ。▼ほとんどの団地の階段は、規定ぎりぎりに作られており、手すりをつけるのは法的に制約されているという。ではその規定はなんのためにあるか。それは危急や災害のとき、階段を避難路として確保しておくためだという。▼なるほど、階段が住む人間の生命の保全のために設けられているなら、老人や病人にとつて、避難のさいの手摺りこそ安全の「キメ手」とはいえないだろうか。高齢化時代はますます進行する。地域コミュニティの生活空間に、洗い直されるべき問題は多いようだ(5月24日付産経新聞・サンケイ抄)

(四) 終幕

(皆さん。有難う。おかげで、手摺りがつきました。)(六月十日)

おかげさまで、手摺りがつく事になりました。階段の皆様には、三月以来、多大の御迷惑をおかけしたにもかかわらず、御協力と御支援をいただき深くお礼申しあげます。理事長さん、他の理事さん方及び事務所の方、その他色々な方に御高配いただき、ほんとに有難うございました。ほんとうに有難うございました。

最後に、いつも、リハビリ歩行訓練中に、遇うたびに、声をかけて、はげましてくださる森川泉ちゃん(小4年)と。そのお友達、並びに弟さんの多聞君(幼稚園児)よ。有難う。

手摺りが出来たので、一生懸命、頑張つて、訓練にはげみ、自転車に乗って廻れるようになって、皆さんに、恩返ししたいと思つております。ほんとうに、心から有難うと申しあげます。

(東京都会員)

那須からの絵葉書

上野明義

八月の或る日の事、紫色の桔梗や山百合の見事に咲いている絵葉書が舞いこんだ。御多忙中の合い間をみて書かれたものらしく早書きで、よく気をつけて読まなければ読めなかつた。そして、栃木県那須と読めた時、「まさか!」とは思ひ乍ら、よく見ると叱驚した。差出人が「入江相政」とあつたのである。何とも云えぬ感激であつた。侍従長の私に対する思いやりを肌で感じ受け止めた時、今度はすらすらと読む事が出来た。何度も何度も読み返してみた。那須へお供をされての途次、旅先からとの文面であつた。途中の川は増水で大変であつたらしく、その有様も詳しく書かれてあつた。

それより、二ヶ月程も以前、私はふとした動機で、入江侍従長の講演を拝聴した。その事は、或る新聞のよほど気

をつけてみなければ見落しそうな一隅に、五六行で掲載されていた。私はすぐその会場である社会教育団体の修養団に電話して、一般聴講も許されるかどうかを問い合せたところ、OK! との事だつた。このようなチャンスはめつたになく、胸をときめかせ、喜び勇んで出かけたのであつた。例の軽嶋一家が三井物産館前より引越して間もない、六月の或る日のことであつた。

講演内容は、天皇陛下の侍従長として約半世紀を過ごされた中での思い出であつた。国賓として来日された世界各国の元首、首長の中には、陛下におあいになると、その人となり感動して、涙してしまふ例が多いという話。又陛下にお仕えしての思い出の中で、戦後の御巡幸の際、いたる所で、各層の国民と天皇との心の通い合う会話を聞かせて載いたというエピソード等々……。

最前列左側に正座して、かしまつてお話を聞いていた私は、偉い人の講演を目の前でお伺い出来る幸せを夢のように感じていた。「侍従とパイプ」「城の中」入江相政著の文庫本二冊を机上に置いて……。

お話が終つて、二三の質疑応答の後、司会者が「最後にもう一人質問をお受けします。どなたかどうぞ!」の由、私は勇を奮つて手を挙げた。「侍従さんはどんなお仕事が主なのですか?」と。すると「世間一般の見方とは違つて、陛下の秘書のような仕事をしています。」とのお答えて、

ある一日の侍従行動を詳しく追って御説明下さった。

その数日後、私は思い切って侍従長に手紙を書いてみた。昔学習院大学で国文学、歴史の教授であられたという、数多くの随筆著作をされた方に、失礼に当らぬように気を配り乍ら、一読者の感想文を送ってみた。こちらの意向を受け止めて戴ければ、只それだけで充分幸せに思う気持ちからだったので、返事を予期するような事はなかった。そしてその事はいつの日にか忘れてしまっていた。

絵葉書を何度も読み返し乍ら、私は正に夢と現実を見比べていた。思わず知らず。今は一世代前の亡き父と祖父母の事を思い出したのである。侍従長の父上、入江為守東宮侍従長（天皇陛下の皇太子殿下時代の侍従長）の事を、祖母から聞いた話しが走馬燈のように一瞬、脳裡をかすめて甦った。農家の一人息子であった私の父が、大正八・九年頃、尋常小学校低学年の時、村の近くに御来遊（北海道）の当時の皇太子殿下（現天皇陛下）に、積丹近効町村管内を代表して、「忠孝」の作文を差上げたことがあったと云う。その礼と云う形で、東宮侍従長は、僻村「古平」迄、余市からボンボン発動機船で約一時間乗り、そして舢の渡し場から更に一里の積丹熊が時々現れる山奥へ、之又約一時間「沢ノ木村」と云う所迄、お一人で歩いて来られたと云う。その学童（作文を書いた生徒・父）を励ましに……。鋤鎌を持ち、畠でいそしんでいた祖父と祖母は尊い方の来村に取る

ものも取り敢えず、ビックリ、ご挨拶をお受けしお迎えしたとか。その時、「この子を立派に育てて下さいね。」とやさしく云われたそう。先年九十三歳で他界した祖母はその時の様子を「イリエ」と云われた天子様にお仕えなされている大した偉い人がお出で下された」と時々話していた。まことに縁は異なもの、御縁は又々続いて、作文を書いたその子の息子である私は、偶然にも、巡り巡る幾多の変遷の結果、弘道会を知ったのである。はからずも特別会員に「入江相政」の名を見出し、当会誌で、侍従長様の文章にお目にかかる事が出来た。厚かましいとは思いますが、又手紙を試してみた。今度は「それはよろしうございました。心の通い合う交遊には年齢の差はありません。那須と東京とを往復しています。云々……。」とのお返事を戴いた。私のような一読者にわざわざ御自筆の手紙を下さる侍従長の心やさしさに感謝し乍ら、私は二代に亘って侍従長と御縁があった事を、言葉では云い表せぬ幸せと思つた。

先年、侍従長御逝去の際、告別式場でご焼香させて戴いた。会場の後ろに立ち乍ら、御長男為年氏の「父の遺骨にハレー彗星をみて戴き度く、その日迄父を自宅でお守りします。」という挨拶を聞いた時、私は涙が出てしょうがなかった。

（東京都會員 司書）

わたしの徳育論

牧 昌 見

一、「徳育」をめぐる課題

徳育ないし道徳教育をめぐる問題は、古くて新しい課題として常に議論的になってきた。古来、知育、徳育、体育というように、徳育が教育の本質にかかわる重要な要素であることについては、大方の同意が得られてきた。いなむしろ徳育ぬきの知育は人間の成長にとって有害であるから、教育の使命は徳育にあるという考え方が一般化しているとみてよい。

つまり徳育は総論においては人間存在の根幹にかかわる意味で万人の認めるところとなっているが、その内容や方法という具体的な問題となると、多様な見解があり、論議が絶えないのが実情というものであろう。今日のように情報社会が進んでくると、並行して多元価値化の傾向が強くなり、総論的な徳育の重視だけでは対応しきれなくなってきた。

教育の荒廃には目にあまるものがあるから、徳育を重視

しなければならぬという単純論法では律しきれない状況におかれているのが、現代である。求められているのは行動レベルでの各論であり、しかもそれが価値の多元化に対応しうるものでなければならぬ。いいかえれば、徳育の重要性を精神的に強調しているだけでは、問題の解決にならないということである。ここに徳育をめぐる今日の状況の困難さがある。

もちろん道徳教育ないし徳育の教育哲学的、教育史的、比較教育学的等の周到な省察が無意味だといっているわけではない。逆に今日だからこそ、これが必要だといえることができる。この意味で、徳育の原理論的考察の振興が今日の課題であるとみてよい。

ただこの種の仕事は、誰れでもが容易になしうるものではない。したがって、実践論としてはどうしても行動のレベルで問題にしなければならぬ。この原理論と実践論は内的な、質的な関連はもちろんあるが、言動のレベル、日常的な行動のレベルでは、しばしばズレがみられるわけがある。

そこで、今日どのような課題があるかを例示的に示すならば、およそ次のようにならう。

(1) 道徳、徳育の普遍妥当性はあるのか、あるとすればどのような意味においてか。

(2) 人間観、価値観がいかにように多様化しようとも、つまり宗教・宗派、政党・政派等が多岐にわたろうとも、人間が社会生活を営む上での共通の社会規範・ルールが必要であるが、この問題をどう考えるべきか。

(3) 道徳、倫理は本来、内的なもの、主体的なものであるから、たとえば教師が外側から子どもに教えることは、もともと不可能ではないのか、どのような条件を満たせばこれが可能になるのか。

(4) 道徳の指導は、全教育活動を通してなされることになっているが、たとえば教科指導のなかでこれが果して可能なのか、これを促進するにはどんな配慮が必要なのか。

(5) 特設「道徳」の見直しが必要ではないのか、道徳的な判断力や実践力の養成が問題にされているが、有効な試みはどれだけあるのか。

(6) 徳育をめぐる、学校、家庭、地域（社会）の役割の分担と協力・連携を見直すことが必要ではないのか。

(7) いわゆる管理教育が話題になっているが、正しい意味での教師の権威が求められているのではないか。

まだまだあるにちがいない。しかし焦点的な課題は何かといえば、多元価値社会における徳育はどうあったらいいかというようなことになるであろう。したがって徳育の振興というとき、これを複眼的にとらえることが要求されているとみてよい。

このような観点に立って、最近の教育政策の動きをみると、いうまでもなく注目されるのは臨教審の第二次答申（昭和六十一年四月二十三日）のなかでの徳育の充実に向けての諸提言である。

二、臨教審の答申と徳育

第二次答申は、第二部として「教育の活性化とその信頼を高めるための改革」を設け、その第三章において「初等中等教育の改革」をあげている。そしてその第一節に位置づけられているのが、「徳育の充実」なのである。この「充実」の方向ないし観点として五項目があげられているが、いわば、その趣旨・意図が「説明①」に述べられている。この説明によると、基本的な考え方は次のようなものであると思われる。

(1) 「自己を他との好ましい人間関係の中でとらえ、自己実現を図ること」が、これからの教育課題として特に重要であるとし、初等・中等の各学校段階ごとに、

指導事項の重点化を図るとしていること。

(2) この線に沿って、まず初等教育段階では、基本的な生活習慣のしつけ、自己抑制力や基本的行動様式の形成・定着、公衆道徳など日常の社会規範を守る態度、郷土や国を愛する心、人間愛や自然愛の芽を育てる豊かな情操などの育成を重視すること。

(3) 中等教育段階では、生き方の指導を重視し、特別活動における学級指導や例えば高等学校の「社会」科の中での指導を改善するとともに、勤労体験や教員以外の者による指導の機会の拡大などにより、自己および進路の確立についての洞察を深めるようにすること。

(4) 徳育の指導にあたっては、生命を尊重し、心身の健康を自ら保持増進するために必要な能力を養い、健康科学の観点に留意すること。

これによって明らかのように、臨教審が提言している徳育の充実というのは、これまでしばしば論争の種になったような、精神的意味での抽象的で情緒的な旧態依然とした徳育論ではないことがわかる。そうではなくて、今日の状況をよく把握した上での、実践的な提言であるということができる。

そこで先に触れた五項目を示せば、次のとおりである。

(1) 初等教育においては、基本的な生活習慣のしつけ、自己抑制力、日常の社会規範を守る態度などの育成を

重視する。また中等教育においては、自己探求、人間としての「生き方」の教育を重視する。

(2) 児童・生徒の発達段階に応じ、自然の中での体験学習、集団生活、ボランティア活動、社会奉仕活動への参加を促進する。

(3) 小・中学校の教育課程における特設「道徳」については、その内容を見直し、重点化を図る。また道徳的実践力を育成するため、特別活動等における道徳指導との関連を強化する。

(4) 道徳教育の充実に資するため、適切な補助教材の使用を奨励する。

(5) 教員養成、現職研修の改善に当たっては、道徳教育に関する教員の指導力を高めるようにする。

これらの項目をみれば明らかになるように、徳育をめぐる改革提言は必ずしも抜本的な制度改革を予定するものではない。いなむしろ各学校における主体的な取り組みを期待しているとみてよい。もっとも国および地方公共団体は、臨教審のいう徳育の充実に即した行政指導を行うことは当然である。

すでに道徳教育の補助教材の使用奨励については、文部省において協力者会議を設け検討を進めている。もっとも都道府県や市町村で副教材等を用意しているところも少なくない。したがって、問題はいよいよ各学校の対応という

ことになってくる。この点については次項で検討する。

徳育をめぐる改革提言として、もう一つ注目すべきことがある。それは、第四部第3節「学校の管理・運営の改善」のなかに、次のような言及があるからである。

「このような教育（管理教育—筆者註）は、児童・生徒の内面の自己抑制能力の向上をもたらし、創造力・考える力・表現力の低下をもたらし、各学校の主体的な対応が大事だといっても、困難をとまなうことが考えられる。この意味では、教師の権威とは何かをあらためて考えてみる必要がある（拙稿「教師の権威と指導力」『教育委員会月報』昭和六十年十二月号参照）。

三、「わが校」での取り組み

このように検討してみると、「わが校」として「わが校」の子どもたちの道徳の指導をどうしたらいいかという実践的課題が重要である。言うまでもなく学校教育が実施されるのは、「わが校」だからである。

もちろん、すべての学校がそれなりの努力を続けている

ことは事実であるが、その効果は必ずしもあがっているとはいえない。そこで徳育の振興に向けて何が大切かを考えてみると、現時点では特に次の二点を指摘することができる。

第一は、わが校における道徳指導の改善のための組織づくりということである。ここでは特に次の三点に留意することが大切である。

その一は学校教育目標について教職員が共通理解をもつことである。道徳の指導が効果をあげるためには「わが校」がそのために存在する学校目標との結びつきを十分に図っておくことが必要である。学校目標は、多くの場合子どもを知・徳・体の調和的発達について学校なりの表現をもって定めたものであり、したがって徳育・道徳との関連はついているともいえるが、教職員の間での共通理解となると、少なからず問題があると思われる。

その二は、学校目標達成に向けて教職員が協働意欲を燃やすことである。それぞれの教師が、それぞれに意欲を燃やすだけでは不十分である。その一と結びつけて「協働」することが肝要である。

その三は教職員間のコミュニケーションをよくすることである。個性・特性を異にする教師であってみれば、いわゆる相性などコミュニケーションを阻害する要因が少なからずある。一人ひとりの教師の自覚が基本とはなるが、徳

育という重要な仕事について、コミュニケーションが途切れるようなことは、もとより望ましいことではない。

ただ注意すべきことがある。共通理解にしても協働意欲にしても、またコミュニケーションにしても、教職員が同質同量に理解したり、意欲を燃やしたり、またコミュニケーションするとうようなことは、所詮現実にはあり得ない。したがって、一人が反対するからといって嘆く必要はない。

むしろそれ故にこそ学校目標に結びつけて道徳の指導を考える必要がある。またそれ故にこそ校長、教頭の指導性が重要になるといってよい。

第二は「わが校」における道徳指導の改善のための計画（P）―実施（D）―評価（S）ということである。ここでは特に計画（P）とは何かを検討すべきである。

すべての学校が、道徳の指導について年間計画等の指導計画を用意しているであろう。しかしここで「計画」というとき、果たして実施（D）や評価（S）をどこまで見通しているであろうか。計画は案であるから、そのあとはやってみなければわからない、というような姿勢があるので、はなからうか。

計画というのは、実施を見通したものでなければならぬ。つまり予想される子どもの反応、それに対する教師の働きかけ、うつ手があらかじめ書きこまれたものでなければならぬ。実施を見通したというわけで、Dと言おう。

それから計画というものは、結果を見通したものでなければならぬ。つまり、期待される成果ないし評価の観点をあらかじめ書いておく必要がある。結果・成果を見通したというわけで、Sと言おう。

このように計画（P）とは、そのうちにDとS、それにP（ねらいと内容）が含まれていなければならない。そうでないと、計画（P）を立てたことにはならないことを知るべきである。

「わが校」としての取り組みが徳育の成否を決する。徳育の改善、充実にとって実践的に重要な観点を示したつもりである。各教師の自覚を促すとともに、学校としての改善努力を期待したい。

（国立教育研究所企画室長）

〔泊翁百話〕

最後の長途旅行



Gu

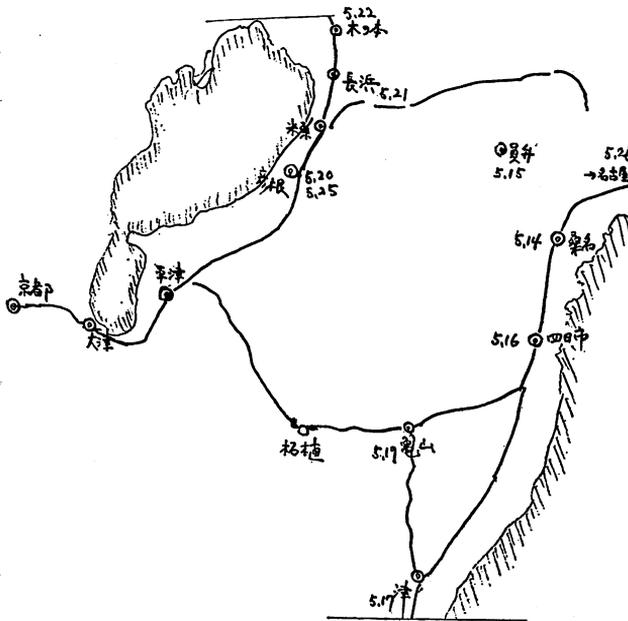
古川哲史

泊翁は明治三十二年八月十日から同十八日まで豊橋を起点とする三河地方の旅をしたが、翌三十三年（七十三歳）五月十三日も朝七時二十五分発の汽車で新橋を立ち、夕刻豊橋に着き、この地で一泊している。そして十四日朝八時十六分発で豊橋を立ち、十時二十九分名古屋着、関西汽車に乗り替えて十一時出発、十二時前桑名に着いた。刈谷無隠と小川隆太郎の両人が駅へ出迎えた。桑名で午饭し、人力車で美濃街道を行き、四里にして員弁郡大泉原村田中郁三方に着き、同家に止宿した。

十五日は午前中希望者のために揮毫し、午後より同地倶楽部で開講した。聴衆百人ばかりあった。

十六日は朝大泉原村を出発、和波隆太郎が送行し、桑名まで戻り、ここから汽車で四日市に至った。郡役所楼上で講話。郡長以下百余名が出席。八百縹楼に宿泊した。

十七日は朝四日市を立ち、津市に至り、加喜伊へ投宿した。午後一時から県会議事堂で婦人会や有志者のために講話した。出席者二百名ばかり。そのあと師範学校講堂で中学校長はじめ師範生徒のために講話した。聴衆三百人があ



った。夕刻から参事官、視学以下の招きに応じ津公園で西洋料理の饗応を受けた。

十八日は午前八時、第一中学校で生徒のために二回の講話をし、刈谷氏の寓居で弁当をすましたあと、阿漕駅発の汽車で相可村に至り、同地の寺院で講話をした。同夜は恭水亭に止宿。亭は櫛田川に臨み、眺望がよかつた。

十九日は朝七時八分相可村をたち、九時十四分亀山着。郡長以下が出迎えた。午後同地の小学校で講話し、柏屋に止宿した。

二十日は朝六時五十分の汽車で出発する予定でいたところ、駅吏の不都合で九時三十分出発となつた。雨中、柘植と草津で汽車を乗り替え、午後一時すぎ彦根着。駅まで衆人の出迎えを受け、ただちに町会議事堂に赴き、公衆のため一場の講話をした。終わって八景園で饗応を受け、陰屋に投宿した。

二十一日は朝八時すぎ彦根を出発。小林以下諸人が同行した。九時すぎ長浜に着き、井筒屋に休憩、午後より議事堂で講話した。多賀宮司岡部讓氏も来た。

二十二日は朝九時すぎ長浜を出発、正午前木の本に着き、駅前の対岳楼で午飯した。楼は賤ヶ岳に対しており、諸家の額字が多い。午後議事堂で講話。途中浄信寺に立ちよつた。この寺は豊太閤の建立であるが、その後兵火にかかっている。古書画の多いのは、維新の際、下賀茂の宝物を売

り払つたとき、この寺の住僧が買い取つたためだという。夕刻この地をたち、米原に戻つて止宿した。

二十三日は朝八時すぎ米原をたち、神崎まで東海道線で行き、ここで阪鶴鉄道に乗り替え、十二、三のトンネルをくぐつて、三時すぎ三田に着いた。郡長以下が出迎え、和田という医師の別宅に宿つた。

二十四日は朝会員の希望に応じて数紙を揮毫した。有馬温泉に来ている西沢之助氏と午後講席に臨んだ。聴衆三百人ほどあり、終つて同所で晚餐会が開かれた。

二十五日は朝六時十分三田を發し、一昨日の道路を経て大阪に向かい、十二時半彦根に着いた。諸人の出迎えを受け、ただちに中学校に行つて生徒のために一場の講話をした。

そのあと八景亭で晚餐会が開かれ、夜は陰屋別店に宿つた。

二十六日は朝九時すぎの汽車で彦根をたち、十二時すぎ名古屋に着いた。諸人の出迎えを受け、山田屋に宿をとつた。午後、市役所議事堂で公衆のため講話をした。聴衆二百人ばかり。終わつて陸軍借行社で有志より西洋料理の馳走になつた。

二十七日は午後になつて出発した。二十二日ごろより少し下痢気味で、その後も回復しなかつたからである。夕刻静岡に着き、清鶴楼に止宿した。

二十八日は朝八時静岡をたち、夕刻四時ごろ新橋着。会員数名が出迎えた。夕刻帰宅した。

泊翁の長途旅行は、右の三十三年五月十三日から同月二十八日まで中部地方巡回が最後で、あとは一泊程度の小旅行があるに過ぎない。すなわち、三十三年十一月十一日は朝九時の汽車で宇都宮に赴き、郡長以下の出迎えを受けた。ただちに旧城館に行き、三時すぎから一場の講演をし、その夜は同館に一泊した。翌十二日は衆人同道で二荒神社へ参詣、松の木一株を奉納して、ただちに汽車で帰京した。その後は一泊程度の小旅行もなくなったが、三十五年（七十五歳）の一月二十三日朝四時起きして、五時三十分出発、千賀夫人、二女澄、下婢さだをともなつて七時二十分発の汽車で熱海へ赴いている。国府津まで汽車、国府津から小田原まで電車（一等四十銭）、小田原から鉄道人車（二等九十九銭）、夕刻四時二十分熱海に着き、かねて依頼しておいた野中小杉精一郎別宅に投宿した。むろん、湯治のため、二月二十七日まで滞在した。その間、内外ともに事件が多く、一月二十三日には青森第五連隊の将校兵卒二百十人が八甲田山の雪中行軍で遭難し、二百九人が凍死した。泊翁は二月十八日、弔慰金三十円を贈った。

一月二十六日夜十一時前市中より出火し、二、三軒が焼失したが、一月三十日の夜にも十一時温泉寺より出火し、寺院は残らず焼失した。二月三日の夜も十一時すぎ木の宮の大乗寺より出火、折からの烈風で泊翁寓居が風下になつて

いたので荷物を持ち出して近所に火を避けた。二時ごろ鎮火した。これらの出火は放火の噂があつたところ、二月五日の朝も四時ごろ、温泉宿藤屋の物置に放火があり、放火者を探えた者へは百円を与える旨の標示が市内所々に出た。他方、二月八日と九日の兩日、喩気館で書画置物の展覽会があつた。二月十九日には、鳥尾得庵の別荘が泊翁寓居の下にあると聞き訪問した。同人は統一学という書の草稿を完成し、時期を見て実行する見込みと聞いた。二月二十一日には右の鳥尾得庵が来訪し、また高嶋嘉衛門が来訪し、明治三十五年度易占一冊を借用した。二十三日にも高嶋氏が来訪し、高嶋易断一帙を贈った。

泊翁の遠出はこの熱海滞在が最後であつたが、二月二十七日早朝熱海をたち、鉄道人車で小田原まで来、それより電車で国府津に至り、ここから汽車に乗り替え、新橋より鉄道馬車に乗り替え、吾妻橋より汽船に乗つて四時すぎに帰宅した。泊翁の亡くなったのはこれから六カ月足らずのちの八月十八日のことで、享年七十五歳であつた。

（本会理事 東大名誉教授）

壇俳道弘



選るしげる塚篠

○大溝をさけて巖にとまる蝶
見も知らぬ人の問いきし良夜かな

千葉県 鈴木とよ女

○香水の香りに越さるる老の足

原句は「香水の香りに越さるる老歩巾」

○灯を背にし簾椅子に在る闇もよし

原句は「簾椅子に暗を抱きて灯を背にす」

○病名を秘しての看護梅雨長し

原句は「病名の言えぬ看護や梅雨長し」

○秋風や病名一つ加わりぬ

○豊なる稲の穂波に試歩のぼす

○夜学する一ツ灯を分け姉妹

さわやか園長輪の中唄の中

もつれとぶ夏蝶供華の前夜

路地裏の生活透けり青すだけ

島根県 小玉 光

○夏蜜柑剥きつゝ月蝕待ちにけり

原句は「夏みかん剥きて月蝕待ちにけり」

○初蝶の眼鏡とる間に失せにけり

○しみじみと家じゅう聞き入る夜の喜雨
原句は「しんみりと家じゅう聞き入る夜の喜雨」

千葉県 加藤 刀水

○春溝の退きし巨巖に蝶とまる

原句は「春溝去りて巨巖や蝶とまる」

○燕来し朝輝きて里の春

原句は「燕来し朝輝きて里の春」

○葦咲いて峽の細道秋暑し

原句は「葦咲いて峽の細道秋暑し」

○妻の櫛おちし音あり今朝の秋

原句は「妻の櫛おちし音あり今朝の秋」

○風鈴の秋立つ風に鳴りにけり

○陰干しの薬草臭う今朝の秋

○夏園に大麦藁の吾子小さし

○葉桜をくぐりて拝む奥社

原句は「初蝶の眼鏡取るまに失せにけり」

○遠山を忽ち消して喜雨来る

原句は「遠山のくらみ了るや喜雨来る」

花ぐもり捨て犬かかへ姉妹

昼寝覚庭の日蔭のひろがれり

額の花濡れてなまめく裏の庭

庭石の火照り鎮めて喜雨到る

原句は「庭石の火照り鎮もる喜雨の中」

こもごもに噺る冷麦一人の餉

千葉県 田村 隆邨

○写経の窓斜すに射抜くや大西日

原句は「写経する窓や西日斜めにす」

○初嵐孫が破りし障子鳴る

○溝萩や傘の雫を切つて訪ふ

千葉県 飯田 萌堤

○初嵐被害の爪跡無く一過

○老残の恙なき身や終戦日

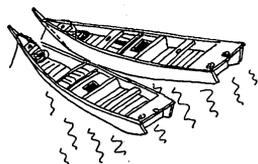
軽庵親子一家皇居のお濠好き

原句は「軽鴨の親子一家皇居堀」

蜜豆や娘等の笑いのとめどなく
初嵐畦一巡の精農家

選者近詠

喜雨来ると仏に灯す母なりし
鮎の川ひろがり翠轡遠さかる
墓原の一景として花茗荷
小やしろの藪蚊まで我を蔑ろ
玉垣覆ふ虎杖神の威に狎れて



壇歌道弘



選史哲川古

所沢市 斎藤 知正

今上天皇御在位六十年記念式典の
さまをテレビに拝して

わらべ歌聞こしめすすめろぎのみ顔仰げば神さびぬます
神ながら神さびませるすめろぎはさゆらぎたまふ調べのまにま
しづかなる天の高原ひかり澄み赤き蜻蛉の群れは飛びかふ
きよらなるわらべの歌におのおのもすなほごころとなるぞ楽し
き

日の本の国のいのちの真実を正眼に仰ぎ涙ぐましも

大君のみのち長く神ながら高知らします国のさきはひ
草莽の民草われも野のはてゆ聖寿万歳を祈りまつるも

沖繩戦跡

ひめゆりの少女らはここに果てにしか暗き地下壕をのぞきて嘆く
陸はつる摩文仁ヶ丘に黙し立てばしじまの底ゆ遠き潮騒
ふるさとに真向ひ坐してとこしへに国守るらむますらをの像

(黎明之塔——この塔は牛島満司令官の故国に向ひ坐禅して自刃せる姿

を象るといふ)

地下壕の堅き岩壁につはものの自決の弾痕穿たれてあり

(旧海軍司令部壕跡)

榴弾に深く傷つきし沖繩の梵鏡は懸かれり寂黙のまま

市原市 加藤 己之

帰りにて母汲み給うぬくき茶をかがまりて受くるわれ仕合せよ
苦しきは人に告げずにあるべしと心に誓い一人堪えおり
濡れつきし岩苔匂う峽路を袖までぬらし登りけるかな
虫の音は小波なして競い鳴きわが住むあたり虫籠のごと
朝霧の晴れゆく庭にあわあわとうす紫のあぢさいの花
山寺の白き障子にたそがれの日ざし移りて鯛の鳴く
大空のまほらの深さ仰ぎつつ庭歩みいて立ちよるけけり
降りだすと思いし空の晴れゆきて飛行機の響きさやかなるかも
万珠沙華もえつぐばかり咲きいでし寺の参道いま登りゆく
露草の花の咲きしをいぢらしと可愛いあ子にわざと手折らす

別府市 椛田 信吾

太極拳せんと出づれば東天に月星ただきわが足軽し
たすね来し十五年振りなる教え子は「お元気でしたか」と涙ため
たり

集い来し三十人余の級友は皆それぞれに五十年の顔
岩戸寺は仁王像あり鳥居あり神仏混濁の姿とどめて

何事も対立多き世にありて貫き通さん愛と誠を

熊野浦逆巻く浪に入らずして伊勢に行きけん公達あはれ
歴史かくスタイル変り翁等はいつも途惑ふばかりなりけり

選者詠

刻々に移る情勢夜半過ぎの電波は伝へ吾をねむらせず
政敵をあやめし報ひ天譴の如くにくだりマルコス去りぬ
マルコスとイメルダ夫人の二十年かくもろきか政権の座は
王朝とうたはれしまでの権勢も抗しかねつも天の声には

寸感

本号は斎藤知正、加藤巳之助二人の力詠を得て充実したものになつた。ことに加藤さんからは応接にいとまがないほど、たくさんの投稿があった。中に「臨終を間近にひかえ……」という一連もある。「臨終は遠き彼方と思ひしに間際となれば何やら悲し」「臨終は只の一期と思へとも間近となれば何やら忙し」など切実な内容で、選をしていながら身につまされる。ただの題詠であればこれでもよいが、事実であれば一大事である。日本人男性の平均寿命が八十歳台になろうとしている現在であるから、加藤さんも「臨終は遠き彼方」として頑張っていたに違いない。

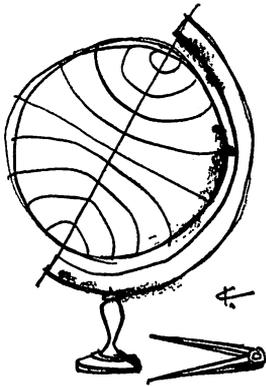
椛田氏の第三首目は「集い来し三十有余の組友は皆それぞれ五十年の顔」が原作。「三十有余」が人数であることを表わすため三十余人」とした。「三十余人」でもよい。「組友」も「級友」のほうが一般的。広辞苑にも「組友」という語はない。

第二首目の前半は「十五年振り訪れくれし教え子は」とあったが、五七五の定型をまもるために「たずね来し十五年振りなる教え子は」

とした。「十五年振りなる」でも字余りになるが、「十五年振りの」では舌足らずなので、あえて「十五年振りなる」とした。字余りを気にしなければ、「十五年振り訪れくれし……」でもよからう。

伊藤氏には「モーコ人数島人とインディアンとシベリヤの野を分れ行きしか」という一首もあったが、何を歌っているのか解せなかつた。

選者詠四首は今年二月に起きたフィリピンの政変劇を題材にした。二月二十二日マルコス大統領の後継者と目されたこともあるエンリケ国防相とマルコスのいとこに当たるラモス参謀総長代行が反乱を起し、マルコス政権の崩壊は刻々とその速度を増し、二十五日の夜九時〇五分マルコスはイメルダ夫人ら家族、ベール参謀総長ら側近をともなつてマラカニアン官殿を脱出、米空軍クラーク基地より米軍機でガム島へ飛び去った。かくして二十年続いたマルコス独裁政権の崩壊が決定的となったが、「おこる者は久しからず」を地で行ったような政変劇であった。



岩手	和歌山	鳥取	"	"	"	"	"	"	"	島根	埼玉	"	"	"	"	"	"	千葉
鈴木	慈木	安下	大井	野々村	千野	狩野	永瀬	飯塚	田中	佐藤	竹蓋	鈴木	小堀	原清	椎名	伊藤	野口	
ニキ	英夫	亀太郎	清三	格淳	哲雄	正道	正洲	一之雄	好吉	芳夫	信夫	隆太郎	清明	勝昇	勝男	かおる		
鈴木	片山	河原	小玉	"	"	"	"	"	鈴木	上山	石橋	"	"	"	"	"	菅谷	
煎	清一	西治	光郎	"	"	"	"	"	煎	定治	香峰	"	"	"	"	"	万歳	

支会だより

千葉県佐倉支会
会計 服部 忠三

昭和61年度佐倉支会総会は、去る四月二十二日(土)午前十時から佐倉市役所六階大会議室に於て開催された。当日は生憎の雨天にもかかわらず、本部から理事の片山清一氏が臨席され出席者総数三十九名という盛況であった。

先づ、青柳嘉忠幹事長の司会によって始められ、石渡敬幹事が開会の辞を、また、藤方恒二会長から総会の挨拶があった。引続いて堀田正久顧問(本部評議員)から祝辞を載いたあと、藤方会長が議長席に着いて議事に入り次の案件を審議した。

◇第一号議案 昭和60年度決算並に事業報告の件

議長の名指により服部忠三会計から60年度の決算と事業について一括説明し、このあと斉藤市郎監事から監査報告があり全員異議なく原案通り可決さ

れた。

◇第二号議案 昭和61年度活動方針の件

青柳幹事長から次の二項目について提案説明し、審議の結果万場一致を以て可決された。

- 1、役員による本部見学並に会祖西村茂樹先生の墓参実施。
- 2、国民の祝日に国旗の掲揚を励行。

◇第三号議案 昭和61年度予算の件
服部会計から予算案について説明し

全員異議なく原案通り可決された。

◇第四号議案 役員改選の件
栗生保新会長を選出したほか、

次の役員がそれぞれ新任或るいは再選された。

- 名誉会長・菊間健夫(再)、顧問・堀田正久(再)、藤方恒二(新)、会長・粟生保(新)、副会長・田辺弥太郎(再)、荒井元吉(再)、幹事長・青柳嘉忠(再) 幹事・村山実(再)、石渡敬(再)、川名部秀雄(再)、井原善一郎(新)、倉次重一(新)、円道寺茂(新)、倉田彰

夫(新)、会計・服部忠三(再)、杉浦末広(新)、監査員・斎藤市郎(再)、宍戸宏(再)

以上で総会は滞りなく無事終了した。

総会のあと記念講演会に移り、講師の片山清一先生から『日本弘道会とは』のテーマで約40分に亘って講話されたが、懇切丁寧にしてわかり易く大変有意義であった。

今後当支会は「少い会費で大きな事業」を合言葉に会祖の教訓を体し精神的な事業を拡めたいものと念願しております。



言葉の

ひろば



世田谷区 岩崎 晶

過日の朝日新聞コラム欄にてのN氏の言葉は、的を射て妙味あり、茲にご紹介しますと、

「先頃、スウェーデンが先進七カ国の子どもの代表を集めて興味あるテストを行った。これによると算数の試験では日本の子どもの正解がずば抜けていたという。

しかし、道に落ちているゴミを拾うかとの問いには、イエスと答えたのはわずか五%、アメリカ、イギリスの四十%に大きく水をあけられている。

また、家の手伝いでも、アメリカが二人に一人、イギリスの三人に一人に

対し、日本は五人に一人。

ウサギ小屋に住む日本人の子どもも部屋の保有率が、アメリカをはるかに上回る不思議な現状を見るにつけ勉強もけつこうだが、情操教育の何たるかを再認識する必要があるそうだ」

以上の如き有様であり、現在の日本の子供は概ね物の考え方が散漫であり、教育界の方々の指導、家庭の躾についても、三省四考して頂きたく存じます。日本の社会の現状、あり方の影響も亦渺ちひなからずあると思惟されますが、次代を担う青少年の全人格的教養の重要性を検討、育成に意を尽される様、各界の方々のご尽力を希ねがうものであります。要之、近隣への配慮、心くばり不足です。

(特別会員)

會員名簿(4)

氏名		職業	住所	氏名	職業	住所
○千葉県…平川支会(三十六名・昭和61・7・25現在)		支会	千葉県君津郡袖ヶ浦町上泉九九八	鶴岡 勝衛		千葉県君津郡袖ヶ浦町百目木 九四一
東平 久雄				金子 政次		大鳥居四一四
石川 実				源辺 賢		野里一〇六八
長島 靖司				大野 和男		横田 二二九
鈴木 良治				勝呂 勉		永地一四六七
石木 正友				関 喜一		百目木四八六
大野 郁郎				宗政 秀治		百目木五二四
野村 二郎				川名 豊		下宮田一三八
川島 春治				浦部 武雄		〃 三四一
吉堀慶一郎				注連野松三		三箇一六二〇
土岐 幸男				阿部 稔		吉野田五六六
永谷 源一				御園 正雄		高谷一三五一
宇田川武雄				切替 正		上泉一四一二
竹内正太郎				大野 健二		横田二三一三
山口 義次				多田 岩夫		〃 五二
井上 正夫				勝呂 正男		永地一四七〇
鈴木 晃				伊藤 義彦		野里 七三一
亀井 三郎				高石 豊守		〃 七二〇

小倉 久	千葉県君津郡袖ヶ浦町百目木 一一〇	越川 昭	千葉県香取郡干潟町清和乙五四三
菅谷 栄夫	支 会 長 千葉県香取郡干潟町清和甲四一	鎌形 善治	〃 〃 〃 南堀之内四三四
高木 徹	〃 〃 〃 〃 七四	高木 真夫	〃 〃 〃 長部二四六
木内 清夫	〃 〃 〃 〃 一一五	高木 泰蔵	〃 〃 〃 二九五
堀江 三良	〃 〃 〃 〃 五〇	木内 三哉	〃 〃 〃 清和甲六五
岩崎 正治	〃 〃 〃 〃 入野八五二一二	小林 慶一	〃 〃 〃 〃 九五
石毛 春雄	〃 〃 〃 〃 七五九	青柳長治郎	〃 〃 〃 〃 二九一
大极 正男	〃 〃 〃 〃 五三五	奈良 利秋	〃 〃 〃 〃 米込六三
菅谷 武雄	〃 〃 〃 〃 七六	星野 誠	〃 〃 〃 〃 南堀之内二五五
菅谷 喜作	〃 〃 〃 〃 八〇	〇千葉県：野田支会(十四名・昭和61・7・25現在)	
宮崎 善一	〃 〃 〃 〃 一五七三	茂木啓三郎	本部・理事 千葉県野田市野田七一六
熱田 弘	〃 〃 〃 〃 米込一四	戸辺 好郎	〃 〃 〃 中野台八〇三
杉崎 久	〃 〃 〃 〃 二二七	川口 幸雄	〃 〃 〃 〃 三七九
宮崎 精二	〃 〃 〃 〃 入野二一六九	高梨 房子	〃 〃 〃 〃 上花輪五〇七
菅谷 定雄	〃 〃 〃 〃 南堀之内三六九	高梨兵左衛門	〃 〃 〃 〃 〃
宮沢 敏雄	〃 〃 〃 〃 三六二	茂木佐登子	〃 〃 〃 〃 野田三七〇
高木泰一郎	〃 〃 〃 〃 三三八	茂木 国子	〃 〃 〃 〃 三三九
高木 豊	〃 〃 〃 〃 三三二	茂木 徳子	〃 〃 〃 〃 五七
菅谷英一郎	〃 〃 〃 〃 三四三	茂木七郎治	〃 〃 〃 〃 三七八
		茂木長三郎	〃 〃 〃 〃 五七
		会 社 役 員	

高梨 均	会社役員	千葉原野田市上花輪五七五
茂木七左衛門	"	"
戸辺 勝恵	"	野田二四五
戸辺 光政	教師	中野台八〇三
○島根県…松江支会(二十六名・昭和61・7・25現在)		
中村芳二郎	松江市長	島根県松江市東津田町一〇九八一
足立 真重	特別会員	雜姜町六五六
齊藤 強	"	西川津町市城二四八四
伊藤慎一郎	"	黒田町四八六一五
川谷 定保	"	莊成町六九
金田 栄禅	"	米子町二一
川谷 勇	"	莊成町二三七
高橋 定一	"	石橋町五六一一
中田 武男	"	外中原町三四〇
妹尾 栄一	"	" 一七二
古瀬 禦	"	" 一六八
米沢 天崖	"	砂子町二〇五
米田 慎	"	雜賀町四一五
山野 正雄	"	上乃木町二六六
佐野伊左夷	"	" 二九四〇

板垣 将成	大久保正厚	水津 卓夫	藤原 恭一	桜内 義雄	竹下 登	諏訪 正積	中村 栄	栗間 久	太田 秀夫	伊藤 操
-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------



"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
島根県松江市内中原町二五三	"	"	"	灘町六一	末次町五〇	新町八三二	東奥谷町四六一五	幸町七九八	東本町四一三	雜賀町四一五七七

日本弘道会創立百拾周年記念式典ご案内

日本弘道会は、泊翁・西村茂樹先生が、わが国における道徳高揚の重要性を痛感され、明治九年三月同志と相謀って「東京修身学社」を創設、その後「日本講道会」・「日本弘道会」と改称されて今日に至りましたが、本年で創立百拾年となりました。

この間、世相の変遷はまことに激しいものがありました、が、会祖の道徳振興への素志を受け継ぎ、一貫してわが国の道徳向上のために努力して参りました。

本会は、これを記念いたしました、左記のように「創立百拾周年記念式典」を挙行し、今後いっそうの発展に努めたいと存じます。

会員各位には是非ご出席下さいますようご案内申し上げます。

記

一、日時 昭和六十一年十一月二日(日) 正午より

二、場所 東京都新宿区六―六一

ヒルトン インターナショナルビル・四階・菊の間

(電話)東京(〇三)三四四一五一一
。国電 新宿駅西口下車

三、日程 受付開始(午前十一時) 開会(正午)

式典 功勞者表彰

賀宴 午後一時二十分―三時

社団法人 日本弘道会

会長 鈴木 勲

編集後記

○銷夏号「たび」の特集をお送りします。「たび」は楽しいものであり、幾つになっても何かロマンを感じさせられるものです。とかく、マンネリになりがちな日常生活から脱出して、そこに新鮮な悦びやら、魅力的な驚ろきを発見する楽しみが待っているからでしょう。ご覧の通り、本号は、いつもと趣きを変えて、全部身近な会員の方々にしぼって執筆をお願いした点で、一味違う編集をさせて頂きました。

お忙がしいところを、玉稿をお寄せ下さって、企画のねらいに充分に應えて下さった会員各位のご協力に、心から感謝いたします。

○小さな旅。大きな旅。その、いずれであろうも「たび人」として何時までも心に残り、かけがえのない人生の一コマとなったものばかりで、書斎では考えもつかない新鮮な体験ばかりでした。

立秋とは名ばかりで、毎日うだるような暑さですが、涼しい木蔭でお読み下さって、ひとときの暑さをお忘れになっていただければ幸いです。

○早いもので、去る七月二十三日は前会長・西村幸二郎先生の一周忌でした。鈴木会長をはじめ私ども事務局の者一同は、思いを新たに、先生が静かに眠る東京・青山の墓所にお花をお供えし、ご冥福をお祈りいたして参りました。

なお、七月十二日西村家ご遺族がホテル・ニューオータニで催された追悼の集いには、鈴木会長と渡辺が代表して参列させていただきました。

(渡辺 薫)

昭和六十一年八月十日印刷 実価 二五〇円
昭和六十一年八月五日発行 年会費一、五〇〇円

編集人 片山 清 一
発行人 鈴木 勲

東京都千代田区神田神保町三ノ一〇
印刷所 共立社印刷所

東京都千代田区西神田三二一六

発行所 社団法人 日本弘道会

電話(〇三)二六〇〇〇九番
振替口座東京四一四三二七
郵便番号 一〇〇一

入江 徳郎 著

(本会評議員)

歩きながら

笑う話

ハードカバー 二二二頁
四六版 一、二〇〇円
定価

送料 一五〇円

横浜市立大学名誉教授
安彦孝次郎 著

上杉鷹山の人間と生涯

A5版四三七頁 頒価四五〇〇円

送料三〇〇円

著者は、今さら紹介するまでもなく、かつて朝日新聞の「天声人語」の執筆者として名声を高め、のちTBSのニュース・キャスターとして長期テレビの画面で活躍、そのかもし出す雄姿は今もなき私どもの憧れなきついでに、本書のあとがきによると「笑うことの少ない世の中なので、この題にしたのだが、校正のケラで読みかえすと『歩きながら』という話か、税に関するくだりなど『歩きながら』の立つ話になつたようである。にもかかわらず、どこかで破顔一笑、ニヤリとしてみえる個所がもしあれば、筆者も喜ばないはなだしいであらう。』……とあり、わが国でも数少ない優れたたニュースライター・入江徳郎氏による近衛文相の好著です。

【目次】

第一章 昔ながら一揆だ 感あり、高度成長の「ビジネス軍歌」…税を取るは「男女の交り」のごとく…(経済強国ニッポン)に関する小話…英国にうらやましがられるほどでなしに、貿易・賭けマレージャン…(ほか4話)
第二章 歩きながら笑う話 歩きながら笑う話…抱腹絶倒・名譽教授とカ、ツラ…(新部よ、先にお亡くなりください)…花も嵐も…ゆくがソープの生さる道…アタマの悪さもタバコのせいか…(ほか6話)がよろしい
第三章 野球はたのし、平和な日本 ニッポンまるごとプロ野球中絶症候群…解説者は「お一人」がよろしい
ようで…野球と人生のゲーム…打席のサムライ…つものども…「激ペン子」の涙
第四章 ああ、ご同輩… 元部長、旧戦場…死す…「甲種合格ジャック」…昭和むかしばなし…聞け「あじあ号」の感嘆の汽笛…レンゲ畑の追憶(ほか4話)
第五章 新入社員諸君! 「傷つ」ことを恐れ過ぎるな…使い捨てカイロ型に告ぐ…適職は役所が教えてます…ダラダラ残業の多い国…近ごろ、女の嫁がない人が減るわけ(ほか3話)
第六章 INSで突っ走るか ハイテク社会の光の影…冷たい社会…「在宅勤務」は困ります…便利なようでも不便な話(ほか2話)
第七章 マスコミの彷徨 山奥で迷った原稿…死にそくなったことども…心に残る言葉…テレビ…最後の失敗…語り部…ある日の感想

本書は上杉鷹山の生涯に亘る業績とその人間性を探究した伝記であつて、戦前「修身」に載つていた挿話のような教訓的意図を以て書かれたものではない。唯最近に於て大方の中には、為政者としての心構えをその中から汲みとりとうとする向きも少なくなく、また彼の藩政改革を、現にみる行財政改革の好範例とする声も頻りである。そうして何よりも、我々の心を動かのは、彼が不幸な家庭を負い乍らよく老臣等の反対に耐え、自ら率先して領民と苦難を共にし私を捨てて藩国の窮乏を救つたそのヒューマニズムの精神である。曾て故ケネディが、日本人の中で最も尊敬する人物の一人として鷹山の名を挙げたと言われているが、それはおそらく鷹山の民主的政治と共にそのヒューマニズムを評価したからであらう。

著者は旧米沢藩領に生れ少年時より鷹山について故老より聞くところが多かつたが、後年自ら史実を探究して本書を成した。大方の高説を得れば幸である。

(発行所)

東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館207

昭和書院

TEL 03 (260) 9354 振替東京 7-182272

(発行所)

〒160 東京都新宿区西新宿3-3-11第2杉本ビル

株式会社 現代出版

TEL 03-342-6984 振替東京 7-43012